翻訳

ヨルダネス『ゲティカ』翻訳（2）：67–130 節
Jordanes, *Getica (History of the Goths)*: A Japanese translation with commentary (2)

加納　修　KANO, Osamu　名古屋大学大学院人文学研究科・教授
小坂俊介　KOSAKA, Shunsuke　愛知教育大学教育学部・講師
村田光司　MURATA, Koji　筑波大学図書館情報メディア系・助教

Abstract

This paper is a continuation of our Japanese translation of *Getica* (*History of the Goths*) written by Jordanes in Latin. Here we publish the chapters 67 to 130, the section in which the author narrates especially the relationship of the Goths with the Roman empire in the third century. As a short introduction, we discuss the importance of newly discovered fragments of Dexippus's work for the study on the Crisis of the third century and the use of historiographical sources by Jordanes.

まえがき

本稿は『ゲティカ』翻訳（1）の続きである。今回訳出するのは第一部（4–130 節。全体の構成については翻訳（1）「まえがき」参照）の後半，第 67–130 節である。67 から 72 節はゴート人に教養を授けたとされる賢人ディキネウスを語り，73 から 75 節にディキネウス死後の二人の王に言及したのちダキアとドナウ流域の地誌的記述を挟む。76 節以降からはゴート人とローマ帝国との関係が主題となる。その途中には例えば 79 から 81 節のアマル家の系譜のような余談が挿入されるが，ゴート人の血筋とされるマクシミヌス・トラクス，またその他のローマ皇帝，ゴート王オストロゴタや彼を継いだクニウァ，ゲベリクそしてエルマナリクといった支配者の治世を枠組みとした叙述が展開されていく。

今回訳出する部分は，ローマ帝国の歴史のなかでは「3 世紀の危機」と呼びならわされてきた時代を扱っている。いわゆる「危機」という評価をめぐってはかねてからの議論があるものの（阪本ほか 2010; 井上 2021），3 世紀後半の帝国東方・北方辺境域が外部集団の攻撃を受け，周辺地域がときに大きな打撃を被ったことは確実視されている（井上 2013）。ヨルダネスはそうした時代を扱うにあたり，おそらくはカッシオドルスをはじめとして，同時代人の叙述に遡りうる様々な典拠に頼っていた（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 65–99）。したがって，ヨルダネスの叙述を出発点にして何らかの問いを投げかけようとするとき，そうした史料との比較は欠かせない作業となる。

しかし，3 世紀後半に著された歴史叙述をめぐってはその伝存状況に由来する制約の大きさが知られる。すなわち，この時代は少なからぬ同時代史叙述を生み出したにもかかわらず，その多くが失われてしまった。幸運な作品であれば後代にその書名や内容が言及されたり，あるいは引用されたりして保存されたものの，それでも断片的に伝わるにすぎない（レイノルズ & ウィルソン 1996; De Blois 1998: Janiszewski 2006; ベック 2014: 458–468; Kulikowski 2018: 144–149; Németh 2018）。ヨルダネスの著作自体がそうした断片の保存庫でもある。こうした事情ゆえに，3 世紀後半の歴史叙述とヨルダネスの著作にかかわる文献学・史料論的探究には多くの障害が立ちはだかっている。

ところが，これらの問題に関して近年注目すべき進展があった。すなわち，3 世紀の歴史家デクシッポスの著作の, 新たな断片の発見である [1]。デクシッポスはアテネの名家におそらく 3 世紀初めごろに生まれ，正確な年代は不明なものの，筆頭アルコンをはじめとする重要公職を歴任したことがギリシア語碑文より知られる（*IG* II^2: 3198, 3669, 3670）。また，267 年前後のこととさ

1　デクシッポスの生涯の基本情報は *OCD*, s.v. “Dexippus, Publius Herennius”; *DNP*, s.v. “Dexippos [2] P. Herennius D.”; *ODLA*, s.v. “Dexippus” の各事典項目より得られる。より詳しくは Millar（1969）; Brandt（1999）; Martin（2006: 25–41）; Mecella（2013: 1–14）参照。

れるヘルリ人のギリシア襲来，アテネ包囲の際には彼自ら軍の指揮を執り，敵を撃退したことが『ローマ皇帝群像』「ガリエヌス伝」13 に伝えられている[2]。

この歴史家デクシッポスには少なくとも 3 点の歴史叙述作品があったことが伝わる。第一にアレクサンドロス大王の死後に生じた後継者戦争を扱った『アレクサンドロス後の歴史』（全 4 巻），第二に神話の時代からローマ皇帝クラウディウス 2 世（ゴティクス，在位 268–270 年）の時代までを扱った『年代記』（全 12 巻），そして第三に『スキュティカ』である。『スキュティカ』はデクシッポスの同時代，3 世紀半ばのギリシア，トラキア，イオニア地方への外部集団の襲来を扱っていたとされる。これらの著作もやはり，4 世紀以降の文献における言及や引用によってそのごく一部が伝存するに過ぎない（Martin 2006; Janiszewski 2006: 39–54, 109–113, 145–149; Mecella 2013: 14–112）。これらのうちヨルダネスが参照した可能性があるのは，その内容に鑑みて『年代記』あるいは『スキュティカ』とされる。しかしヨルダネスがそれらを直接に参照したのか否か，また直接としてもいずれの著作であったのかは判断し難い（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 74–75）。

先述の通りデクシッポスの『年代記』および『スキュティカ』は双方とも失われており，その一部が後代の作品での引用や要約などによって知られるだけであった。しかし 2007 年に J. Grusková の調査によって，11 世紀に筆写された『スキュティカ』本文の断片がオーストリア国立図書館蔵のパリンプセスト写本内に発見された（Codex Vindobonensis hist. gr. 73, fols. 192r–195v; Grusková 2010: 42–53）。この断片は 4 フォリオ，つまり 8 ページ分と短いが，従来不明瞭だった数多くの問題群に新たな光を投げかける貴重な新出史料であり，現在では「Scythica Vindobonensia」ないし「Dexippus Vindobonensis」の呼称が定着している（写本についての詳細は De Gregorio et al. 2020）。これら断片のテクストは，2022 年までに 6 ページ半が学界に紹介された（Martin & Grusková 2014a; Martin & Grusková 2014b; Grusková & Martin 2014; Grusková & Martin 2015; Grusková & Martin 2017a; Grusková & Martin 2017b; Martin & Grusková 2020; Martin & Grusková 2022）。それらは三つのまとまった部分に分けられるが，一つ目（fol. 195rv）は 250 年ないし 251 年のゴート人によるフィリッポポリス攻撃について，二つ目（fol. 194rv）はその戦いのあと，ローマ軍の再編の動きについて，そして三つ目（fols. 192–193 のうち現在までに解読された fol. 192r 後半および 192v–193r）は少し時を置いたあとの，ゴート人によるマケドニア攻撃の様子を記述している（253/4 年か 254/5 年，あるいは 260 年代初頭の間で意見が割れている：Gengler 2020; Martin & Grusková 2022: 481–485 を参照）。

ヨルダネス『ゲティカ』が明示的にデクシッポスに言及するのは，ヴァンダル人の一派ハスディングに関する 113 節の一箇所のみである（『スキュティカ』F29［Martin 2006］＝ F28［Mecella 2013］）。しかし『スキュティカ』新出断片の公刊に伴い，『ゲティカ』101 –103 節，あるいはよ

2　ただしこの時軍を率いたのは実際には歴史家デクシッポスではなく，3 世紀にボイオティア連邦の公職を務めた「グナイオス・クルティオス・デクシッポス」なる人物であり，『ローマ皇帝群像』作者はこの二人を混同したとする説がある（Suski 2017）。後者の「デクシッポス」については岸本（2021: 226–227）も参照。

り広く 89–109 節の記述とデクシッポスとの関連が論じられるようになってきた（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 74–75; Brodersen 2020; Martin 2020; Mitthof 2020）。本稿では個々の訳註においていくつかの点を紹介するに留めるが，その発見は直後から注目を集め，研究が急速に進展している（Mitthof, Martin & Grusková 2020: 565–570 の 2020 年までの関連文献目録を参照）。そしてそれらの成果は 3 世紀後半を扱った政治・軍事史叙述にすでに反映されつつある（クリコフスキ 2022: 221–222）。そうした研究の進展は，3 世紀後半におけるローマ帝国とゴート人の関係をめぐる歴史叙述，ヨルダネスの文学史上の位置づけ，さらにはヨルダネスの叙述内容の信憑性に関する評価を今後書き換えていく可能性を十分に秘めている。

『スキュティカ』の新出断片は細切れに刊行されており全体像の把握が容易ではないが，Martin & Grusková（2022）での発表分以外は，Martin & Grusková（2020）に既刊行分のテクストがまとめて提示されている。そのため本稿で新出断片を引用する際には，初出の文献および Martin & Grusková（2020）の双方の頁数を挙げることとする。一方で従来のデクシッポス断片も 2000 年代に入ってから 2 種類の校訂本が独立して公刊されているため，引用の際にはその両方の断片番号を載せることとする（Martin 2006; Mecella 2013）。

以下，翻訳の方針について記す。校訂本や現代語訳の利用，括弧の用い方，章・節番号と固有名詞の表記，gens や natio などいくつかのラテン語の訳し方，ヨルダネスが『ゲティカ』執筆の際に用いた史料ならびに『ゲティカ』に関連する史料の挙げ方については，原則として翻訳（1）の「凡例および註記」にしたがったので，そちらを参照していただきたい。ただし，翻訳（1）では「ライン川」や「ドナウ川」を慣用とみなして，「川」という単語が原文で用いられていないにもかかわらずそのように表記したのに対して，今回以降は「川」，「海」，「山」などの言葉がない場合には，ライン，ドナウ，ナイルのような著名なものを除いて，括弧で補うことにした（たとえば，「〜［川］」）。同じく写本や主要な参考文献は翻訳（1）に挙げてあるが，67 から 130 節の訳註において初出となる史料，事典・辞書類ならびに研究文献は以下にまとめたので，あわせて参照していただきたい。史料に関しては，翻訳（1）では現代語訳があるものについてはそれらを挙げるにとどめたが，今回からは校訂版や別の現代語訳を参照した場合には，それらも文献一覧に追記することにした。

訳註の付け方に関して若干補足する。固有名詞については引き続き各種事典類を引くとともに，4 世紀までのローマ皇帝については一貫して *RKT* も挙げることにした。翻訳（1）では統一できていなかったが，ゲルマン系の固有名詞については常に *RGA* にあたるよう努めた。写本における異読・異綴りについては，原則として固有名詞にかぎって異綴りを載せたが，底本とした Grillone 版のアパラトゥスは取りあげていない固有名詞が多いため，Mommsen 版のアパラトゥスも活用した。また Grillone による写本の読みと Mommsen のそれはしばしば異なっているが，すべての写本を確認することはせず，その旨を記すにとどめた。最後に，訳者が気づいたかぎりにおいて，翻訳（1）における訂正箇所を載せた。

なお，本まえがきにおいて 3 世紀後半の歴史叙述，とりわけデクシッポスおよびその新発見断

片にかかる部分は，小坂・村田が共同で執筆した。

文献一覧（追加分）

ヨルダネス『ゲティカ』の現代語訳（追加）

Martens, W. (tr.) (1913) *Jordanis Gotengeschichte nebst Auszügen aus seiner Römische Geschichte*, 3 neubearbeitete Aufl., Leipzig: Verlag der Dykschen Buchhandlung.

『ゲティカ』翻訳（1）：加納修・小坂俊介・村田光司（2022）「ヨルダネス『ゲティカ』翻訳（1）」『東方キリスト教世界研究』6: 3–57.

その他の史料（訳註作成にあたって参照した現代語訳もしくは校訂版）

アエリウス・スパルティアヌス他『ローマ皇帝群像（ヒストリア・アウグスタ）』：南川高志・桑山由文・井上文則訳（2004–2014）『ローマ皇帝群像』（全 4 巻）京都大学学術出版会

エウセビオス『教会史』：秦剛平訳（2010）『エウセビオス「教会史」』（全 2 巻）講談社（講談社学術文庫）

エウトロピウス『首都創建以来の略史』：エウトロピウス研究会訳（2007–2014）「エウトロピウス『首都創建以来の略史』翻訳」（全 8 編）『上智史学』52: 99–140; 53: 133–155; 54: 141–176; 55: 141–171; 56: 147–184; 57: 179–216; 58: 177–216; 59:165–184.

カッシオドルス『綱要』：R. A. B. Mynors (ed.) (1937) *Cassiodori Senatoris Institutiones*, Oxford: Clarendon Press; J. W. Halporn & M. Vessey (tr.) (2004) *Institutions of Divine and Secular Learning and On the Soul*, Liverpool: Liverpool University Press; 田子多津子訳（1993）「カッシオドルス『綱要』」上智大学中世思想研究所編訳・監修『中世思想原典集成 5　後期ラテン教父』平凡社 , 329–417 [第 1 巻序文，第 10 章，第 29 章それぞれの抄訳，および第 2 巻全体の日本語訳].

カッシオドルス『雑纂』：T. Mommsen (ed.) (1894) *Cassiodori Senatoris variae*, MGH AA 12, Berlin: Weidmann.

カッシオドルス『年代記』：T. Mommsen (ed.) (1894) *Chronica minora saec. iv. v. vi. vii*, vol.2, MGH AA 11, Berlin: Weidmann.

キュプリアヌス『死を免れないことについて』：吉田聖訳（1990）「ラテン教父の総合研究　アフリカの殉教者キプリアヌス（6）『死を免れないことについて』翻訳と注釈 Cyprianus, *De Mortalitate*」『南山神学』13: 81–103.

『コンスタンティヌス帝の生まれ』：J. C. Rolfe (ed. & tr.) (1939) *Ammianus Marcellinus*, vol.3, Cambridge, MA: Harvard University Press: 506–531.

シドニウス・アポリナリス『詩』：A. Loyen (ed. & tr.) (1960) *Sidoine Apollinaire, Poèmes*, Paris: Les Belles Lettres; W. B. Anderson (tr.) (1936) *Sidonius Apollinaris. Poems and Letters,* vol. 1: *Po-*

ems, Letters, Books I–II, Cambridge, MA: Harvard University Press.

「聖書」：聖書協会共同訳（2018）『聖書　旧約聖書続編付き　引照・注付き』日本聖書協会

ゾシモス『新しい歴史』：F. Paschoud (ed. & tr.) (1971–1989) *Zosime: Histoire nouvelle*, Paris: Les Belles Lettres; R. T. Ridley (tr.) (1982) *Zosimus: New History*, Canberra: Australian Association for Byzantine Studies.

『テオドシウス法典』：テオドシウス法典研究会訳（1995）「テオドシウス法典（Codex Theodosianus）（4）」『専修法学論集』63: 107–131[抄訳，315 年 10 月から 316 年に発布の計 22 法文の日本語訳].

『テオドリック王の告示』：I. König (ed. & tr.) (2018) *Edictum Theodorici regis. Das „Gesetzbuch" des Ostgotenkönigs Theoderich des Grossen*, Zweisprachige Gesamtausgabe, Lateinisch und deutsch, Darmstadt: wbg (Wissenschaftliche Buchgesellschaft).

デクシッポス『スキュティカ』：G. Martin (ed. & tr.) (2006) *Dexipp von Athen: Edition, Übersetzung und begleitende Studie*n, Tübingen: G. Narr; L. Mecella (ed. & tr.) (2013) *Dexippo di Atene: Testimonianze e frammenti*, Roma: Edizioni Tored [新出断片については，研究文献欄の以下を参照：Martin & Grusková 2014a; Martin & Grusková 2014b; Grusková & Martin 2014; Grusková & Martin 2015; Grusková & Martin 2017a; Grusková & Martin 2017b; Martin & Grusková 2020; Martin & Grusková 2022. また近年解読が進んだ『スキュティカ』序文のテクストとして Németh 2020].

ヒエロニュムス『年代記』：R. Helm (ed.) (1956) *Eusebius Werke 7: Die Chronik des Hieronymus*, 2 Aufl., Berlin: Akademie Verlag.

プトレマイオス『アルマゲスト』：J. L. Heiberg (ed.) (1898–1903) *Claudii Ptolemaei opera quae exstant omnia*, vol. I: *Syntaxis Mathematica*, 2 partes, Leipzig: B. G. Teubner; 薮内清訳（1993）『アルマゲスト（復刻版）』恒星社

『プトレマイオス理論教程』：D. Pingree (ed. & tr.) (1997) *Preceptum Canonis Ptolomei*, Louvain–la–Neuve: Academia Bruylant.

プロコピオス『建築について』：J. Haury (ed.) (1964) *Procopii Caesariensis opera omnia*, vol. IV: *De aedificiis libri VI*, Leipzig: B. G. Teubner; D. Roques (tr.) (2011) *Procope de Césarée, Constructions de Justinien Ier: Introduction, traduction, commentaire, cartes et index*, Alessandria: Edizioni dell'Orso.

フロンティヌス『戦術書』：C. E. Bennett (ed. & tr.) (1925) *Frontinus. The Stratagems and the Aqueducts of Rome*, Cambridge, MA: Harvard University Press.

ヘロディアヌス『マルクス帝没後のローマ史』：E. C. Echols (tr.) (1961) *Herodian of Antioch's History of the Roman Empire from the Death of Marcus Aurelius to the Accession of Gordian III*, Berkeley–Los Angeles: University of California Press.

FGrHist = F. Jacoby et al. (1923–) *Die Fragmente der griechischen Historiker*, Berlin: Weidmann and Lei-

den: Brill.
IG = *Inscriptiones Graecae* (1873–)

事典・辞書類

CLRE = R. S. Bagnall, A. Cameron, S. R. Schwartz & K. A. Worp (1987) *Consuls of the Later Roman Empire*, Atlanta, GA: Scholars Press.
PLRE, I = A. H. M. Jones, J. R. Martindale & J. Morris (1971) *The Prosopography of the Later Roman Empire, vol. I: A.D. 260–395*, Cambridge: Cambridge University Press.
RKT = D. Kienast, W. Eck & M. Heil (2017) *Römische Kaisertabelle: Grundzüge einer römischen Kaiserchronologie*, 6. überarbeitete Aufl., Darmstadt: wbg (Wissenschaftliche Buchgesellschaft).
『ゴート語辞典』＝千種眞一（1997）『ゴート語辞典』大学書林

研究文献

Boteva, D. (2001) “On the Chronology of the Gothic Invasions under Philippus and Decius (AD 248–251)”, *Archaeologia Bulgarica*, 5(2): 37–44.
Boteva, D. (2020) “Some Considerations Related to the *Scythica Vindobonensia*”, in Mitthof, Martin & Grusková (2020): 195–212.
Brady, L. & P. Wadden (eds.) (2022) *Origin Legends in Early Medieval Western Europe*, Leiden–Boston: Brill.
Brandt, H. (1999) “Dexipp und die Geschichtsschreibung des 3. Jahrhunderts n. Chr.” in M. Zimmermann (ed.) *Geschichtsschreibung und Politischer Wandel im 3. Jh. n. Chr.*, Stuttgart: Franz Steiner Verlag: 169–181.
Brodersen, K. (2020) “*in modum fulminis*: Cniva und Ostrogotha bei Jordanes und in den *Scythica Vindobonensia*”, in Mitthof, Martin & Grusková (2020): 147–157.
Burns, T. S. (1994) *Barbarians within the Gates of Rome: A Study of Roman Military Policy and the Barbarians, ca. 375–425 A.D.*, Bloomington–Indianapolis: Indiana University Press.
Constambeys, M. (2022) “Origin Legends in Italy in the Early Middle Ages”, in Brady & Wadden (2022): 75–108.
Courcelle, P. (1984) *Lecteurs païens et lecteurs chrétiens de l’Enéide I: Les témoignages littéraires*, Paris: Gauthier–Villars – De Boccard.
Courtois, C. (1955) *Les Vandales et l’Afrique*, Paris: Arts et Métiers graphiques.
De Blois, L. (1998) “Emperor and Empire in the Works of Greek Speaking Authors of the Third Century AD”, in W. Haase (eds.) *Aufstieg und Niedergang der Römischen Welt*, Band II, 34, 4, Berlin–New York: De Gruyter: 3391–3443.
De Gregorio, G., E. Gamillscheg, J. Grusková, O. Kresten, G. Martin, B. Mondrain & N. Wilson (2020)

"Palaeographical and Codicological Remarks on the Vienna Dexippus Palimpsest", in Mitthof, Martin & Grusková (2020): 5–13.

Den Boeft, J., J. W. Drijvers, D. den Hengst & H. C. Teitler (2018) *Philological and Historical Commentary on Ammianus Marcellinus XXXI*, Leiden–Boston: Brill.

Gengler, O. (2020) "Eine neue Datierung des Goteneinfalls gegen Griechenland unter Valerianus und Gallienus", in Mitthof, Martin & Grusková (2020): 219–234.

Grusková, J. (2010) *Untersuchungen zu den griechischen Palimpsesten der Österreichischen Nationalbibliothek: Codices historici, codices philosophici et philologici, codices iuridici*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

Grusková, J. & G. Martin (2014) "Ein neues Textstück aus den „Scythica Vindobonensia" zu den Ereignissen nach der Eroberung von Philippopolis", *Tyche*, 29: 29–43.

Grusková, J. & G. Martin (2015) "Zum Angriff der Goten unter Kniva auf eine thrakische Stadt (*Scythica Vindobonensia*, f. 195v)", *Tyche*, 30: 35–54.

Grusková, J. & G. Martin (2017a) "Rückkehr zu den Thermopylen: Die Fortsetzung einer Erfolgsgeschichte in den neuen Fragmenten Dexipps von Athen", in A. Eich, S. Freund, M. Rühl & C. Schubert (eds.) *Das dritte Jahrhundert. Kontinuitäten, Brüche, Übergänge (Ergebnisse der Tagung der Mommsen–Gesellschaft am 21.–22. 11. 2014 in Wuppertal)*, Stuttgart: Franz Steiner Verlag: 267–281.

Grusková, J. & G. Martin (2017b) "Neugelesener Text im Wiener Dexipp–Palimpsest (*Scythica Vindobonensia*, f. 195v, Z. 6–10) mit Hilfe der Röntgenfluoreszenzanalyse", *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik*, 204: 40–46.

Harper, K. (2017) *The Fate of Rome: Climate, Disease, and the End of an Empire*, Princeton: Princeton University Press.

Janiszewski, P. (trans. by D. Dzierzbicka) (2006) *The Missing Link: Greek Pagan Historiography in the Second Half of the Third Century and in the Fourth Century AD*, Warsaw: Warsaw University, Faculty of Law and Administration.

Jones, A. H. M. (1964) *The Later Roman Empire 284–602: A Social, Economic, and Administrative Survey*, Oxford: Basil Blackwell.

Juste, D. (2004) "Neither Observation nor Astronomical Tables: An Alternative Way of Computing the Planetary Longitudes in the Early Western Middle Ages", in C. Burnett, J. P. Hogendijk, K. Plofker & M. Yano (eds.) *Studies in the History of the Exact Sciences in Honour of David Pingree*, Leiden–Boston: Brill: 181–222.

Kakridi, C. (2005) *Cassiodors* Variae*: Literatur und Politik im ostgotischen Italien*, München: K.G. Saur.

Kasperski, R. (2022) "The Origin Legend of the Goths in the *Getica* by Jordanes", in Brady & Wadden (2022): 135–155.

Korkkanen, I. (1975) *The Peoples of Hermanaric: Jordanes,* Getica *116*, Helsinki: Suomalainen Tiedeakatemia.

Luiselli, B. (1980) “Cassiodoro e la storia dei Goti”, in *Passaggio dal mondo antico al medio evo: Da Teodosio a San Gregorio Magno (Convegno internazionale, Roma, 25–28 maggio 1977)*, Roma: Accademia nazionale dei Lincei: 225–253 [= Luiselli (2017): 479–512].

Luiselli, B. (1983) “I dialoghi scientifici tra Cassiodoro e Teoderico”, in V. Cappelletti, B. Luiselli, G. Radnitzky & E. Urbani (eds.) *Saggi di storia del pensiero scientifico dedicati a Valerio Tonini*, Roma: Jouvence: 59–68 [= Luiselli (2017): 513–521].

Luiselli, B. (2017) *Romanobarbarica: Scritti scelti*, Firenze: SISMEL–Edizioni del Galluzzo.

Maenchen–Helfen, O. (1973) *The World of the Huns: Studies in Their History and Culture*, Berkeley–Los Angeles: University of California Press.

Martin, G. (2020) “Fernbeziehungen in Dexipps *Skythika*”, in Mitthof, Martin & Grusková (2020): 95–110.

Martin, G. & J. Grusková (2014a) “„Dexippus Vindobonensis“ (?): Ein neues Handschriftenfragment zum sog. Herulereinfall der Jahre 267/268”, *Wiener Studien*, 127: 101–120.

Martin, G. & J. Grusková (2014b) ““Scythica Vindobonensia” by Dexippus (?): New Fragments on Decius’ Gothic Wars”, *Greek, Roman, and Byzantine Studies*, 54: 728–754.

Martin, G. & J. Grusková (2020) “*Scythica Vindobonensia* alias *Dexippus Vindobonensis*: Vorläufige Transkription”, in Mitthof, Martin & Grusková (2020): 543–548.

Martin, G. & J. Grusková (2022) “Facing the Plague and the Goths: A New Passage from the *Scythica Vindobonensia* (*Codex Vindobonensis Hist. Gr.* 73, Fol. 192r, Lines 13–30)”, *Greek, Roman, and Byzantine Studies*, 62(4): 438–493.

Mathisen, R. W. (2006) “*Peregrini*, *Barbari*, and *Cives Romani*: Concepts of Citizenship and the Legal Identity of Barbarians in the Later Roman Empire”, *The American Historical Review*, 111: 1011–1040.

Millar, F. (1969) “P. Herennius Dexippus: The Greek World and the Third–Century Invasions”, *Journal of Roman Studies*, 59: 12–29.

Mitthof, F. (2020) “Bemerkungen zu Kaiser Decius und seinem Gotenkrieg 250–251 n. Chr.”, in Mitthof, Martin & Grusková (2020): 311–336.

Mitthof, F., G. Martin & J. Grusková (eds.) (2020) *Empire in Crisis: Gothic Invasions and Roman Historiography*, Vienna: Holzhausen.

Moisl, H. (1981) “Anglo–Saxon Royal Genealogies and Germanic Oral Tradition”, *Journal of Medieval History*, 7: 215–248.

Moralee, J. (2008) “Maximinus Thrax and the Politics of Race in Late Antiquity”, *Greece & Rome*, 55: 55–82.

Moravcsik, G. (1958) *Byzantinoturcica*, 2 Bds., Berlin: Akademie–Verlag.

Napol'skich, V. (2016) "Ermanarichs *arctoi gentes* (Jordanes *Getica*, 116). Versuch einer Interpretation", *Ancient Civilizations from Scythia to Siberia*, 22: 26–54.

Németh, A. (2018) *The Excerpta Constantiniana and the Byzantine Appropriation of the Past*, Cambridge: Cambridge University Press.

Németh, A. (2020) "Dexippus in the *Excerpta Constantiniana* Revisited: The Preface to Dexippus' *Scythica*", in Mitthof, Martin & Grusková (2020): 111–134.

Piso, I. (2020) "Bemerkungen zu Dexippos Vindobonensis (II)", in Mitthof, Martin & Grusková (2020) : 337–355.

Pizzani, U. (1986) "Cassiodoro e le discipline del quadrivio", in S. Leanza (ed.) *Flavio Magno Aurelio Cassiodoro (Cosenza–Squillace 19–24 settembre 1983)*, Soverìa Mannelli: Rubbettino Editore: 49–71.

Richardson, J. S. (1991) "*Imperium Romanum*: Empire and the Language of Power", *Journal of Roman Studies*, 81: 1–9.

Richardson, J. S. (2008) *The Language of Empire: Rome and the Idea of Empire from the Third Century BC to the Second Century AD*, Cambridge: Cambridge University Press.

Roth, J. (1999) *The Logistics of the Roman Army at War (264 B.C.–A.D. 235)*, Leiden–Boston–Köln: Brill.

Schilbach, E. (1970) *Byzantinische Metrologie*, München: C. H. Beck.

Soustal, P. (1991) *Thrakien (Thrakē, Rodopē und Haimimontos)*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

Suerbaum, W. (1977) *Vom antiken zum frühmittelalterlichen Staatsbegriff: über Verwendung und Bedeutung von res publica, regnum, imperium und status von Cicero bis Jordanis*, 3., erweiterte Aufl., mit Einem Bericht 'Römisches Staatsdenken in der neueren Forschung' (1960–1975), Münster: Aschendorff.

Suski, R. (2017) "Dexippus and the Repeling of the Gothic Invasionin the Years 267–268: A New Piece of Evidence (*Codex Vindobonensis Hist. Gr.* 74, FF. 192 V–193R) with an Explanation of an Error Commited by the Author of the *Historia Augusta* (*HA Gall.* 13, 7)", *Eos*, 104: 303–316.

Tihon, A. (1981) "L'astronomie byzantine (du Ve au XVe siècle)", *Byzantion*, 51: 603–624 [= A. Tihon (1994) *Études d'astronomie byzantine*, Aldershot: Ashgate: no. I].

Vitiello, M. (2006) *Il principe, il filosofo, il guerriero: Lineamenti di pensiero politico nell'Italia ostrogota*, Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

Wildberg, C. (2005) "Philosophy in the Age of Justinian", in M. Maas (ed.) *The Cambridge Companion to the Age of Justinian*, Cambridge: Cambridge University Press: 316–340.

Wolfram, H. (2020) "Ostrogotha — ansischer Amaler oder glückloser Feigling", in Mitthof, Martin & Grusková (2020): 17–34.

阿部晃平（2020）「『ソロモンの哲学の書』(*Liber de philosophia Salomonis*)」『史苑』81(1): 155–

182.
井上文則（2021）「三世紀の危機とシルクロード交易の盛衰」大黒俊二・林佳世子（責任編集）『岩波講座　世界歴史 3　ローマ帝国と西アジア　前 3 ～ 7 世紀』岩波書店 : 269–289.
岸本廣大（2021）『古代ギリシアの連邦　－ポリスを超えた共同体』京都大学学術出版会
クリコフスキ，マイケル（阪本浩訳）（2022）『後期ローマ帝国史 I　帝国の勝利』白水社
阪本浩，新保良明，井上文則ほか（2010）「2009 年度大会共通論題報告　論題　3 世紀の「危機」再考」『西洋史研究』新輯 39: 178–272.
ジョーンズ, アーノルド・H・M（戸田聡訳）（2008）『ヨーロッパの改宗　－コンスタンティヌス《大帝》の生涯』教文館
真川明美（2016）「カール大帝による「ローマ人のパトリキウス」称号の受容をめぐって」『史学』86(3): 43–72.
新保良明（2000）『ローマ帝国愚帝列伝』講談社
テスター，ジム（山本啓二訳）（1997）『西洋占星術の歴史』恒星社厚生閣
土井健司（2015）「「キュプリアヌスの疫病」考：古代キリスト教におけるフィランスロピア論のための予備的考察」『神学研究』62: 25–39.
南雲泰輔（2022）「ローマ帝国の衰亡と「古代末期」の気候変動　－気まぐれな自然が蝕んだ帝国の回復力（レジリエンス）－」長谷川岳男編『はじめて学ぶ西洋古代史』ミネルヴァ書房 : 251–272.
プライザー＝カペラー, ヨハネス（小澤実訳）（2020）「微生物学からみた初期グローバリゼーション：二世紀から八世紀の疫病と帝国の絡み合い」『史苑』81(1): 101–116.
ベック，ハンス＝ゲオルク（戸田聡訳）（2014）『ビザンツ世界論　－ビザンツの千年－』知泉書館
ヘリン，ジュディス（井上浩一訳）（2022）『ラヴェンナ　－ヨーロッパを生んだ帝都の歴史－』白水社
保坂高殿（2008）『ローマ帝政中期の国家と教会　－キリスト教迫害史研究　193–311 年－』教文館
マクニール, ウィリアム・H（佐々木昭夫訳）（2007）『疫病と世界史』（全 2 巻）中央公論新社（中公文庫）
南川高志（2018）「ローマ的世界秩序の崩壊」南川高志編『歴史の転換期 2　378 年　失われた古代帝国の秩序』山川出版社 : 20–69.
吉村忠典（2003）『古代ローマ帝国の研究』岩波書店
ランソン，ベルトラン（大清水裕訳）（2012）『コンスタンティヌス　－その生涯と治世』白水社（文庫クセジュ）
レイノルズ，L・D & N・G・ウィルソン（西村賀子・吉武純夫訳）（1996）『古典の継承者たち－ギリシア・ラテン語テクストの伝承にみる文化史－』国文社

翻訳（1）への訂正

16 頁 5 行目　（誤）lat. 920　（正）Pal. lat. 920
16 頁 33 行目　（誤）Morand, A.–L. (ed.)　（正）Morand, A.–L. (ed. & tr.)
17 頁 8 行目　（誤）Cambridge, MA–London: Harvard University Press
（正）Cambridge, MA: Harvard University Press
17 頁 27 行目　（誤）J.–L. Charlet (ed.)　（正）J.–L. Charlet (ed. & tr.)
17 頁 32 行目　（誤）M. Billerbeck et al. (eds.)　（正）M. Billerbeck et al. (eds. & tr.)
18 頁 1 行目　（誤）Weidemann　（正）Weidmann
27 頁訳註 13，2 行目　（誤）小川訳（2004）　（正）岡・高橋訳（2001）
27 頁訳註 13，3 行目　（誤）見にくい　（正）醜い
30 頁 13 行目　（誤）ライン川河口　（正）ライン河口
37 頁 1 行目　（誤）ロドウルフ　（正）ロドゥウルフ
40 頁 2 行目　（誤）メオティス海の周囲全体（正）メオティスの周囲全体
40 頁 3 行目　（誤）メオティス海を越え　（正）メオティスを越え
40 頁 10 行目　（誤）イステル川　（正）イステル［川］
同　（誤）ドナウ川　（正）ドナウ
40 頁 11 行目　（誤）ポントゥス海　（正）ポントゥス
40 頁訳註 138，1 行目（誤）メオティス海（マエオティス海）
（正）メオティス（マエオティス）
40 頁訳註 138，2 行目（誤）「メオティス海」の読み
（正）「メオティス」の読み
40 頁訳註 138，3 行目（誤）メオティス海の入口全体を
（正）メオティスの入口全体を
41 頁 4 行目　（誤）メオティス海に流れ込む（正）メオティスに流れ込む
41 頁 5 行目　（誤）タナイス川　（正）タナイス［川］
同　（誤）この沼地の周囲は　（正）この湖の周囲は
41 頁 7 行目　（誤）ティシア川　（正）ティシア［川］
42 頁 1 行目　（誤）ドナウ川　（正）ドナウ
同　（誤）フルタウシス川　（正）フルタウシス［川］
42 頁 2 行目　（誤）イステル川　（正）イステル［川］
42 頁 7 行目　（誤）ダナステル川　（正）ダナステル［川］
42 頁 8 行目　（誤）ウィスクラ川　（正）ウィスクラ［川］
同　（誤）これらの人々は沼地と　（正）これらの人々は湖と
42 頁 10 行目　（誤）ダナステル川からダナペル川
（正）ダナステル［川］からダナペル［川］

46 頁 11・12 行目（誤）タナイス川　（正）タナイス
同　（誤）大きな沼　（正）大きな湖
47 頁 4 行目　（誤）ダナペル川　（正）ダナペル［川］
47 頁 6 行目　（誤）ポントゥス海　（正）ポントゥス
47 頁 9 行目　（誤）ヒュパニス川　（正）ヒュパニス［川］
47 頁 11 行目　（誤）沼地のせいで　（正）湖のせいで
51 頁 3 行目　（誤）アラクセス川，キュスス川，カンビセス川
（正）アラクセス，キュスス，カンビセス
54 頁 2 行目，55 頁 10，11 行目（3 箇所）　（誤）ドナウ川（正）ドナウ

ヨルダネス『ゲティカ』（67–130）

XI. 67. その後ブルイスタ[1]がゴート人を統治しているあいだに，ディキネウス[2]がゴティアにやって来たのだが，それはスラ[3]がローマ人に対する元首の座を得たときであった。ブルイスタはこのディキネウスを迎え入れ，彼に王とほぼ等しい権力を与えた。彼の助言により，ゴート人は，いまフランク人たちが有しているゲルマン人の地を略奪した。68. さて，カエサルはすべてのローマ人の中で最初に帝権を主張し[4]，ほぼ全世界を自己の支配下に服従させ，すべての王国を征服し，私たちの世界[5]の外で大海の内奥に隔離されていた島々を[6]支配するほどであり，ローマ人の名を耳にしたこともない人々をローマ人に対する貢納者にするほどであったが，何度か試みたものの

1　ゲタイの王ブルイスタ（?– 紀元前 44 年以前 ? : *DNP*, s.v. “Burebista(s)”）はストラボン『地理誌』7.3.5, 7.3.11（16.2.39 も参照）において「ビュレビスタス」（Βυρέβιστας）の名で登場しており，『ゲティカ』67 もそこを（直接ないし間接的に）参照した可能性がある（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 70, 252–253）。Buruista の綴りは，クラス II 写本では boruista。

2　『ゲティカ』39 で言及された人物。Deceneus（Grillone 版）の読みは写本に基づいておらず，Mommsen 版 Dicineus をとる（以下同様）。

3　このスラは，Lucius Cornelius Sulla Felix（紀元前 138–78 年）に比定される。彼がローマのディクタトルであったのは紀元前 81–80 年のこと（*DNP*, s.v. “Cornelius [I. 90] Sulla Felix, L.”; *OCD*, s.v. “Cornelius (RE 392) Sulla Felix, Lucius”）。

4　Grillone 版の読みである “Romanorum ... imperium” はクラス II と III に基づく。Mommsen 版はクラス I に従い “Romanum ... imperium” と読む。ここで「帝権」と訳した imperium は，共和政ローマでは執政官を筆頭とする政務官が有した「命令権」ないしその「命令」を意味する語であった。イタリア外の征服地を管轄する属州総督もこの権利を保持したことから，この言葉は転じてローマの支配が及ぶ地理的範囲，すなわち「帝国」を意味するようになる。帝政期以降は皇帝が命令権を事実上独占したことから imperium には皇帝の権力，さらに皇帝の地位といった意味も付加されていった（Richardson 1991, 2008; 吉村 2003: 3–76）。このような言葉の多義性はヨルダネスのテクストにおいても認められ，さらには『ゲティカ』98 や 112，248 のようにゴート人などの王の支配権力やフン人の帝国を意味する場合もある（ヨルダネス『ローマーナ』も含めた用例の検討として Suerbaum 1977: 268–278 参照）。こうした事情から，imperium の語はその都度文脈に応じて訳すことになる。ここではヨルダネスがユリウス・カエサルを，共和政から帝政への変化における先駆的存在として位置づけていることを考慮して「帝権」と訳した。

5　“nostrum orbem”: 写本 A，B，X，Y の読みで，英語訳もこちらをとる。Mommsen 版は “nostro urbe”（V）「私たちの都」。他方で Mommsen 版を底本とするドイツ語訳は「陸」（Festland）と訳す。

6　“in oceani sinu sepositas insulas” : sepositas は写本 A のみに見られる読み（Mommsen 版によれば，A の読みは “in oceano sepositas insulas” であるが，Grillone 版は A の sepositas 以外の読みを記していない）。Mommsen 版は主にクラス III が伝える “in oceani sinu repositas insulas”「大海の内奥に位置していた島々」。なおこの「島々」は，カエサルが紀元前 50 年代半ばに攻撃したブリテン諸島のことと考えられている（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 253 n. 258）。

ゴート人たちを屈服させることはできなかった。いまやガイウス・ティベリウスが 3 人目としてローマ人を支配している[7]。しかしゴート人は彼の支配においても無傷であり続けていた。[M69] 彼らにとって，健全であり，都合が良く，望ましかったのは，彼らの助言者であるディキネウスが命じたことは何であれ，完全に追及されるべき，もしくは有益であると判断して，実現されるようにすることであった。

69. 彼〔ディキネウス〕は，彼ら〔ゴート人〕がすべてにおいて彼に従いやすい性質を持ち，また生来の知性を備えているとみて，彼らにほぼすべての哲学を教えた。というのも彼はこの分野に精通した教師だったからである[8]。かくして彼は彼らに倫理学を教えて，野蛮な風習を封じ込めた。自然学を伝え，彼らが，今日まで書かれて伝わり「ベラギネス」と呼ぶ彼ら自身の法にしたがって自然に生きるようにした[9]。論理学を教え，彼らを他の民（ゲンテス）よりも理性に精通させた。実践を

7　写本はすべて “Gaius Tiberius” の読みを伝えるが，一般にティベリウスの名で呼ばれるローマ皇帝であるティベリウス・クラウディウス・ネロ（在位 14–37 年：*RKT*: 70–73）は，現在では 2 代目皇帝とするのが一般的であり，またガイウスと一般に呼ばれるのはむしろ 3 代目のカリグラ（在位 37–41 年：*RKT*: 78–80）である（ヨルダネス『ローマーナ』258–259 も参照）。しかし古代末期においては，例えばヨルダネスが利用できたヒエロニュムス『年代記』やカッシオドルス『年代記』など，ティベリウスを（カエサル，アウグストゥスに続く）3 代目とする事例もある（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 253 n. 262 も参照。とはいえヨルダネスは『ゲティカ』243 でアウグストゥスを初代としている）。Grillone 版は，当初 Caesar を意味して Tiberius の前に付されていた C の文字が，写字生によって Gaius の省略形と勘違いされたのではないかと考え，“C. Tiberius” と校訂している（Grillone 2017: 323 n. 315）。また Mommsen 版（Mommsen 1882: 73）においても，この Gaius をヨルダネスの間違いとする Gutschmid の意見が掲載されている。これらは十分に有り得ることと考えられるが，写本上に根拠を持たないため，本文では Gaius の読みを採用した。

8　以下では哲学の 2 種類の分類方法が並列的に述べられている。哲学を倫理学，自然学，論理学から構築するのはストア派の思想である。一方で哲学を実践と理論の側面から探究するのはアリストテレスによる理解とされる。ここでヨルダネスは，哲学の複数の分類方法を一緒くたに，ないしは組み合わせて説明している。双方の考え方とも，同時代のラテン語圏に見出すことができる（例えばカッシオドルス『綱要』2.3 ではアリストテレス的な哲学の区分が紹介されている。詳しくは Pizzani 1986; Vitiello 2006: 95–100; Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 254 n. 265; 阿部 2020: 155–160）。ヨルダネスは哲学の定義については古代からの伝統を正確に述べているが，リシェ（1988: 72）が既に気づいていたように，その内容として彼が紹介するものは自然界の現象に関する（寄せ集めの）知識に限られている。リシェ自身明示的に述べているわけではないが，このような哲学の中身も，カッシオドルスを始めとする 6 世紀初頭の西方世界におけるそれに典型的なものであった（リシェ 1988: 33–34, 68–69, 71–74）。Luiselli（1980: 252; 1983）が早くから提唱し，近年 Vitiello（2006: 92–94）が他の先行研究もまとめて改めて論じたように，『ゲティカ』69–72 におけるディキネウスの話題は，カッシオドルスの理解，つまり彼の『ゴート史』の記述が強く反映されたものと考えられている。

9　「ベラギネス」（belagines）という言葉は『ゲティカ』のこの箇所でしか確認されていないが，ゴート語に由来することは確かなようである（語源については，さしあたり Devillers 1995: 143 n. 120; *RGA*, s.v. “belagines”; Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 254 n. 263）。「彼ら自身の法」（“propriis legibus”）と表現される「ベラギネス」が

示し，善行に励むよう説得した。理論を示し，黄道十二宮とそこを通る惑星の軌道およびすべての天文現象を観察するよう指導し，どのようにして月面が増減するかを説明し，太陽という火の球がどれほど大地の円盤をその規模において越えているかを示し，いかなる名前やいかなる星座のもとに，天の極で行き来する 346 の星が東から西へ駆け抜けるのかを説明した [10]。70. きわめて屈強な男たちが，少しのあいだであれ武器を手放しているときに，哲学の教えに親しんでいたのは，なんと喜ばしいことではないか。あなたは見るであろう，ある者は天の位置を，別の者は草と灌木の性質を調査し, この者は月の好影響と悪影響を [11], かの者 [12] は太陽の諸活動 [13] を注意深く観察し，そしてどのようにして天の回転に捕われたものたち〔惑星〕が，西方へと戻されなが

何を指しているのかについては,『テオドリック王の告示』を指す可能性を指摘するもの, あるいは伝統的なゴート人の規範を含意するものなどいくつかの説がある。さしあたり Constambeys（2022: 86）を参照。なお，本節で説明されるゴート人の「文明化」については『ゲティカ』39–40 および Kakridi（2005: 137–139）と Kasperski（2022）を見よ。

10　ヨルダネス（ないしカッシオドルス）がここで述べる天文学の体系が具体的に何に由来しているのかは定かではないが，古代末期にはアレクサンドリアやアテネを中心に，プトレマイオス『アルマゲスト』やその早見表，要約，そしてそれらの注解が出回っていた（Tihon 1981）。少なくともカッシオドルスは,『綱要』2.7 でそうした作品の一部に触れている。Pingree（1997）は，その具体的なひとつとして 6 世紀の編纂とされる逸名の『プトレマイオス理論教程』を挙げるが，この説には異論もある（Juste 2004: 181–185 を参照）。ヨルダネスは「天の極」（“polus caeli”）の星々の数を 346 としているが，Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 254 n. 264）も指摘するようにこれはプトレマイオス『アルマゲスト』8.1（邦訳 348 頁）における，黄道星座の星の数（≠ 天球上の星の数）に対応する。6 世紀前半のコンスタンティノープルにおいて，体系的な天文学の知識がどれほど学べたのかについては不確かなことが多く（ユスティニアヌス治下での学問とその教授については，さしあたり Wildberg 2005 を参照），ヨルダネス本人がプトレマイオスの体系を学んでいたのかどうかも判断が難しい。

11　「この者」（istum）とは, 直前の「草と灌木の性質を調査」する者のことと解釈した。「月の好影響と悪影響」（“lunae commoda incommodaque”）：これは英語訳とフランス語訳の解釈であり，ドイツ語訳とイタリア語訳では「月の満ち欠け」とする。なお，ここで述べられる草木と月の関係は，月齢が植物の成長などに影響を及ぼすとする古代以来の考え方に触れたものとも考えうるが（例えばプリニウス『博物誌』2.102.221, 18.75.321–325 ほか），「哲学」ないし天文の文脈での説明であることを踏まえると，その考え方を応用した占星（医）術の実践を指すとみたほうが良さそうである（cf. テスター 1997: 32, 84–85）。リシェ（1988: 71–74）が指摘するように，少なくともカッシオドルスの理解する哲学には，占星術の要素が含まれていたからである。

12　「かの者」（illum）は上の「天の位置を」調査する者のことと解釈した。

13　“solis labores”：直訳したが，ウェルギリウス『アエネーイス』1.742 における同様の表現（“Hic canit errantem lunam solisque labores”）は「日食」と解釈されており，ヨルダネスあるいはカッシオドルスがここで日食を意図していた可能性も残される（『ゲティカ』におけるウェルギリウスの利用を分析した Van Hoof 2019 はこの事例には触れていない）。古代末期において明らかに日食を意図してこの表現を用いた作家として，Courcelle（1984: 135）はヴェローナのゼノ（4 世紀：*ODLA*, s.v. “Zeno of Verona”）とドラコンティウス（450 年頃 –500 年以後：*ODLA*, s.v. “Dracontius, Blossius Aemilius”）の作品を挙げている。

らも，東の方に向かおうと急ぐのかを調べ[14]，そして理を学んで温和になるのだ[15]。
71．ディキネウスはその知識によってゴート人たちにこれらや他のことを伝え，彼らのもとで驚異的な人物として輝き，単に平民だけでなく，さらに王たちにも命令を与えることができるほどであった。すなわち彼は，彼ら〔ゴート人〕の中から当時きわめて高貴でより賢明であった人々を選び，神学を教え込み，いくつかの神々と聖域を敬うよう説得して祭司にし，彼らに「ピレアティ」という名を与えた。私が考えるにそれは，私たちが「ピレイ」という別名で呼んでいる冠で頭を覆ったまま彼らが犠牲を捧げていたからである[16]。［M72］さらに彼は，民族（ゲンス）の他の者たちを「カピラティ」と呼ぶように命じた[17]。72．ゴート人たちはこの名前を素晴らしいものとして受け入れ，今日においてなお彼らの歌の中で想起している[18]。

XII．73．しかしディキネウスが死ぬと，彼らはほとんど同等の敬意でコモシクス[19]を遇した。なぜなら彼はその賢さにおいて全く劣っていなかったからである。実際，彼は彼らにとって，その知識ゆえに王かつ祭司とされており，全き公正さで民衆を裁いていた。彼が人の世を去った後，コリュルス[20]がゴート人の王として王位に上った。そして40年にわたりダキアにおいて彼の諸民族（ゲンテス）を支配した。74．私が述べているのは，いまやゲピドの民（ポプリ）が所有することが知られるかつてのダキアのことである。ドナウの向こうモエシアに面したこの故郷は山脈の頂によって囲ま

14　東ゴート王アタラリック（在位526–534年）がカッシオドルスに宛てた書簡に，テオドリック王の行いとして星々の動きを観察した話が記されている。カッシオドルス『雑纂』9.24を参照（Mommsen 1882: 74による。リシェ1988: 85も見よ）。

15　70節の後半は，先行する現代語訳とは異なり，惑星の日周運動と年周運動が表現されていると解釈した。前後の節と併せ，詳細は別稿で論じる予定である。

16　「ピレアティ」（Pilleatorum）は，字義通りには「ピレウス帽をかぶった者たち」。『ゲティカ』40も参照。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 255 n. 270）は，多くの例を挙げつつ，ここでヨルダネスがゴート人の祭司をローマ人のそれと結びつけているのだと推測している。

17　「カピラティ」(Capillati)は，字義的には「髪のふさふさした者たち」であるが，6世紀のイタリアにおいてゴート人有力者に宛てた称号として用いられていた（カッシオドルス『雑纂』4.49ほか）。一方，Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 255–256 n. 271）は，ここでは高貴な人々を指すpilleatiとの対比で，capillatiはその他のゴート人を指しているのではないかと推測する。*RGA*, s.v. “Haar– und Barttracht” も参照。

18　reminiscuntur：Mommsen版はreminiscent（HPVL），つまり「想起するだろう」。

19　Comosicum：Grillone版アパラトゥスによればクラスI，IIの読みで，クラスIIIではcomosacumとされているが，Mommsen版に基づけば，写本A，O，Bではcommosicum。他では知られていない。

20　Grillone版Scorylusの綴りは写本には見られないので，Mommsen版Coryllus（HPV）を採用する。他にcoryllus（HPV），corillus（LOXY），chorillus（A），corillius（B）。Grilloneはフロンティヌス『戦術書』1.10.4に言及されるダキア人指導者スコリュロ（Scorylo）と同定するゆえにこの読みをとるが，このダキア人は紀元前1世紀の人物である（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 256 n. 273も参照）。

れていて，出入り口は二つしかなく，ひとつはボウタエを通り，もうひとつはタパエを通る道である[21]。これがゴティアである[22]。（古人たちがダキアと呼び，私たちが述べたように今日ではゲピディアと言われる[23]）そこ〔ゴティア〕は，当時は東ではロクソラニ人[24]，西ではイアジュゲス人[25]，北ではサルマタエ人とバステルナエ人[26]，南ではドナウ川の流れが境界となっていた。今日イアジュゲスとロクソラニはただアルトゥス川[27]によって隔てられている。

75．ドナウに言及したので，この傑出した川について僅かばかり触れることは理に反していないと私は判断する。それ〔ドナウ川〕はアラマン人[28]の平原に端を発し，その源流からポントゥスに流れ込む河口までに[29]，1,200 ミッレ・パッスス[30]の流程のあいだに，脊椎のようなかたちで肋骨を織り込むかのように，両岸から 60 本の河川を受け取っており，まさしくきわめて広大であ

21　Boutae の指す場所は不明。Tapae については，『ゲティカ』63 参照。なお，Tapas については tabas（OB），zapas（A）の異綴りが見られる。

22　Grillone 版：“...alterum per Tapas: haec Gothia. Quam (Daciam appellauere maiore, quae nunc Gepidia dicitur)”。Mommsen 版：“…alterum per Tapas. haec Gothia, quam Daciam…”。 モムゼン版の区切りに従えば，「これがゴティアである」と訳した部分は不要となり，「古人たちが～と言われるこのゴティアは」となる。

23　Mommsen 版：“quae nunc, ut diximus, Gepidia dicitur” を採用する。Grillone 版は，“quae nunc Gepidia dicitur” として “ut diximus” をクラス III 写本 N, Q, T の読みとするが，これらクラス III 写本だけでなく，クラス I（VPLA），II（O）の写本にも見られるからである。

24　Grillone 版 Roxolani は写本 Q の roxolanis に基づく。Mommsen 版では Aroxolani（HPVLOB）を採用する。紀元 1 世紀からドナウ川下流北部に存在が証明される Roxolani のことと想定される。ストラボン『地理誌』2.5.7; 7.2.4; 7.3.17 および *OCD*, s.v. “Sarmatae (Σαρμάται, Σαυρομάτα)”; *DNP*, s.v. “Sarmatae (Σαρμάται, Σαυρομάται/ Sauromátai; lat. *Sarmatae*)”; *ODLA*, s.v. “Sarmatians (Sauromatians)”; *RGA*, s.v. “Sarmaten” を参照。

25　Iazyges：写本 P，H の読み。異綴りも見られるが，Grillone と Mommsen の読みはかなり異なっている。ストラボン『地理誌』7.2.4 によれば，同じくサルマタエ人の一部。紀元前 1 世紀からパンノニアに居住（*DNP*, s.v. “Iazyges, Iazuges (Ἰάζυγες)”）。本稿訳註 24 も参照。

26　Basternae：異読として bastene（OB）。ゲルマン系とされる（*DNP*, s.v. “Bastarnae, Basternae”; *OCD*, s.v. “Bastarnae”; *RGA*, s.v. “Bastarnae”）。詳しくは『ゲティカ』91 の「ペウキニ」に関する註を参照。

27　ドナウ川の支流オルト川。『ゲティカ』翻訳（1）33 節訳註 162 参照。

28　Alamannicis：異読として almannicis（B），alia mannicis（O），alamagnicis（A），alemannicis（X）。ドナウ川上流とライン川上流に挟まれた地域に住むゲルマン人を中心とする集団（*DNP*, s.v. “Alamanni”; *ODLA*, s.v. “Alamans (Alamanni)”; *OCD*, s.v. “Alamanni (Alemanni)”; *RGA*, s.v. “Alemannen”）。

29　ソリヌス『驚異譚集成』13.1 およびアンミアヌス・マルケリヌス『歴史』22.8.44。

30　つまり 120 万パッスス。1 ミッレ・パッススは 1 マイルに等しい（『ゲティカ』109 も参照）。*OCD*, s.v. “measures of length” によれば，ギリシア語圏での 1 ペース（pes）はおよそ 295mm から 333mm，ラテン語圏では 296mm。5 ペース（pedes: pes の複数形）＝ 1 パッススのため，およそ 1,800km。

る。ベッシ人[31]の言葉でヒステルと呼ばれるこの川は，深さだけでも 200 ペース[32]あり，深い水を川底に湛えている。というのもこの川は，他の川と比べて，ナイルを除けばその大きさにおいて他のすべてを凌駕しているのである。ドナウについては以上のことを述べておけば十分であろう。それでは，主の助けを借りて，いったん遠ざかった話題へと戻ろう[33]。

XIII．76．さて長い時間が経過し，ドミティアヌス帝の治世[34]にその強欲を恐れて，かつて他の元首たちと結んでいた同盟を解消したゴート人たちは，長らくローマ帝国により保持されていたドナウの川岸を，兵士たちを彼らの将軍もろとも打ち負かして荒らした。当時その属州は，アグリッパの後にオッピウス・サビヌス[35]が統治していて，他方でゴート人に対して支配権を行使していたのはドルパネウスであったが，戦が始まるとゴート人はローマ人を破り，オッピウス・サビヌスの頭を切り落とし, 多くの城塞や町を襲撃し, 皇帝の財産を公然と略奪した[36]。77．ドミティアヌスは配下の者たちの苦境を見て，全ての力をもって[37]イリュリクムへと急ぎ，フスクス[38]を国家のほぼ全軍の将に任じて，最精鋭と共にドナウ川を，ドルパネウスの軍に対峙すべく[39]橋の

31　トラキアに住む集団で，古代の文献に頻繁に言及される（*DNP*, s.v. “Bessi, Bessoi (Βεσσοί)”; *ODLA*, s.v. “Bessi”）。

32　約 60m。

33　Grillone 版：“ad propositum unde nos digressi sumus”。なお “digressi sumus” は写本 L，A，O，B，X，Y に基づくのに対して，Mommsen 版：“ad propositum vero, unde digressimus” は写本 H，P，V の読みを採用する。また vero（「それでは」）の脱落について Grillone 版は特に断っていないが，見落としと推測されるため，補って訳出した。Mommsen 版アパラトゥスでも vero を欠く写本は挙げられておらず, 写本 L, O にも確認できたからである。

34　ローマ皇帝ドミティアヌス（在位 81−96 年：*RKT*: 109–112）。

35　Sabinus : クラス II・III の読み。Mommsen 版 : Savinus（クラス I）。モエシア総督として知られる（*DNP*, s.v. “Oppius [II 2] C.? O. Sabinus”）。

36　原文は “de parte imperatoris publice depraedarunt” で，publice について異読は確認できない。英語訳は「皇帝の公的な財産を」，フランス語訳は「皇帝に損害を与えるようなかたちで国家財産を」，イタリア語訳は「皇帝に属する国家財産を」として，publice を parte にかかる形容詞のようにとらえている。しかし古典ラテン語に則れば，publica となるはずである。他方でドイツ語訳は，副詞として öffentlich と訳しており，ここでも副詞として解釈した。

37　“cum omni uirtute”：英語訳・イタリア語訳・フランス語訳に準じた訳で，ドイツ語訳のみ「勇敢さ」（“mit seiner ganzen Tapferkeit”）と訳している。

38　コルネリウス・フスクス（*OCD,* s.v. “Cornelius (RE 158) Fuscus”; *DNP*, s.v. “Cornelius [II 16] C. Fuscus”）。紀元後 69 年の内乱時にウェスパシアヌスに味方し，のちドミティアヌスにより近衛長官に任ぜられた。

39　“super exercitum Dorpanei”：ドイツ語訳・フランス語訳・イタリア語訳は super を「対する」のニュアンスで訳すが，英語訳のみ「ドルパネウスの軍の上流で」。

ように船をつないで渡るよう［彼らに］強いた[40]。
78. そのとき，ゴート人はまったく緩慢ではないことが示され，武器を取るや，ただちに最初の戦でローマ人を打ち負かし，将軍フスクスを殺し，兵士たちの陣営から富を奪った[41]。かくして広大な地域に勝利を得た[42]彼らは，彼らの指導者を，いわば彼らの幸運によって勝利したということで，いまや純然たる人ではなく，半神，すなわち「アンセス」[43]と呼んだ。彼らの系譜を，たとえば誰がどの親から生まれたかを，あるいはその起源がどこから始まりどこで終わるかを，少しばかり話しておこう[44]。これを読む方は，偏見を持たずに，私が真実を語るのを聞きなさい。

40　coegit：Mommsen 版の読み。Grillone 版は Mommsen 版アパラトゥスでの修正提案に従い coepit「渡り始めた」と読むが，写本には基づかない。英語訳・フランス語訳・ドイツ語訳・イタリア語訳はそれぞれが底本とする版の読みに従っている。

41　以上のように『ゲティカ』76–78 で語られる出来事は紀元後 86–87 年のこととされる。この箇所はオロシウス『異教徒を論駁する歴史』7.10.3–4 およびエウトロピウス『首都創建以来の略史』7.23 を敷衍している（別の史料との関連について Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 258 n. 293 も参照）。

42　“magnaque potiti per loca uictoria”：magna が修飾する語を loca と uictoria のどちらと考えるかに応じて訳が異なる。英語訳・ドイツ語訳は “magna ... loca” と，イタリア語訳・フランス語訳は “magna ... uictoria” と考えてそれぞれに訳している。本訳では『ゲティカ』83 の記述との対応を考慮して英・ドイツ語訳のように訳したが，イタリア・フランス語訳のように訳すならば「その地方一帯での大勝利を得て」となる。

43　Anses：クラス III の読みで，Mommsen 版は Ansis（クラス I），クラス II は ianses。ゲルマン語でオーディンの従者を意味する言葉 áss（古英語の ōs）に由来するとみなされている。ゴート人がその指導者を「アンセス」と呼んだのは，ゴート人がゲルマン語由来の言葉を借用したか，もしくは王たちを神の末裔とみなしていたためと考えられるが，Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 259 n. 294）は後者の解釈を斥ける。

44　“– uel quis quo parente genitus est – aut unde origo coepta, ubi finem effecit”：Grillone 版と Mommsen 版で句切り（パンクチュエーション）が異なり，文末の “ubi finem effecit” の主語を quis ととるか，origo ととるかで解釈が分かれている。Mommsen 版に従う英語訳・ドイツ語訳では「誰がどの親から生まれ，どこにその起源があり，どこで亡くなったのか」となる（ドイツ語訳は「どこで」を未訳出）。

XIV．79．したがって，彼ら自身がその物語で伝えるように，これら英雄の最初はガプトであり[45], ガプトはフムル[46]をもうけた。フムルはアウギスをもうけ, アウギスはアマル[47]と呼ばれる者をもうけた。アマル一族の始まりは彼に由来する。このアマルはヒサルニス[48]をもうけ，さらにヒサルニスはオストロゴタ[49]をもうけ, さらにオストロゴタはフヌイル[50]をもうけた[51]。またフ

45　以下に記されるゴート王の系譜は，アマラスエンタとエウタリクス夫妻に至るアマル家の支配の正統性を根拠づけるものとなっており，史実の反映とはみなされていない。挙げられる多くの王はこの箇所の他には知られず，系譜の作成はおそらくカッシオドルスに遡ると考えられている。カッシオドルス『雑纂』11.1.19 はアマラスエンタの父祖として 9 人の王に言及している（それぞれの人物について以下の註を参照）。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 259 n. 295），Heather（1989），Christensen（2002: 124–159），および『ゲティカ』翻訳（1）42 節訳註 192 も参照。なお Gapt の語意について Moisl（1981: 219–222）は「戦神に捧げられた者」なる意味と解し，ヨルダネスの叙述においてアマル家は戦神の恩寵ある軍事指導者と位置付けられている，と論じている。

46　Humul：Mommsen 版は Hulmul（クラス I）で，他に halmal（クラス II），humal（クラス III）。Giunta & Grillone（1991）はクラス III をとっている。Humul は写本 H にのみ，かつ hulmul と並んで見られる読みだが，Grillone（2017: 329 n. 349）は先行研究の指摘を受けつつ，その名がデーン人やアングル人の王家固有の名前であるという Humli に関係する可能性を述べている。

47　Amal：クラス I の一部（HPLA）および写本 O に見られる読み。異綴りに hamal（V）がある。なお，写本 O での 79 節に相当するテクストには二つの読みがある。写字生が同じ部分を誤って繰り返し写したためである。これに Mommsen 版アパラトゥスは O^1，O^2 の区別を付している。このアマルはカッシオドルス『雑纂』11.1.19 に幸運な王（“Hamalus felicitate”）として言及される。

48　Hisarnis：クラス I（A を除く）および写本 N の読み。異綴りに isanis（Y），isarna（SOBA）。

49　Ostrogotha：異綴りに ostrogota（X），hostrogotha（L）。カッシオドルス『雑纂』11.1.19 がその忍耐を称賛する（“Ostrogotha patientia”）。「オストロゴタ」なる人物の史実性はしばしば疑われてきたが（*RGA*, s.v. “Ostrogotha” を参照），デクシッポス『スキュティカ』新出断片から，3 世紀半ばの同名のスキュティア人指導者の存在が裏付けられた（Grusková & Martin 2014: 35; Martin & Grusková 2020: 546）。

50　Hunuil：クラス I（A を除く）および写本 X，Z。異綴りに hiniul（Y），unilt（O^1B），unil（SO^2）がある。写本 A は判読が難しく，Mommsen 版アパラトゥスは hunnull と hunnuil の読みを並べている。

51　“Ostrogotha autem genuit”: 写本 A のみ “ostrogotha qui fuit pater” と読む（「オストロゴタが父親となった［フヌイルは］」）

ヌイルはアタル[52]をもうけ, アタルはアキウルフ[53]とオドゥウルフ[54]をもうけた。さらにアキウルフはアンシラ[55]とエディウルフ[56], ウルトゥウルフ[57]とヘルメネリク[58]をもうけた。ウルトゥウルフはウァララウァンス[59]をもうけた一方で, ウァララウァンスは[60]ウィニタリウス[61]をもうけ, そし

52　Athal：異綴りはなし。“Athal genuit”：写本 A のみ patrem（「[アタルを] 父親としてアキウルフと …」）。なお写本 S と O^2 はアタルからウルトゥウルフまでを省略する。アタルについてはカッシオドルス『雑纂』11.1.19 がその寛大さを称賛する（“Athala mansuetudine”）。

53　Achiulf: Mommsen 版（クラス I）, 異綴りに achiuf（B）, achliulf（XYZ）。Grillone 版 Achiuulf は『ゲティカ』24 に言及されるロドゥウルフなる名前を参照しての修正だが, 写本に根拠を持たない（続く文章の「アキウルフ」も同様）。

54　Oduulf: 写本 H, P, V, X。異綴りに odiuulf（Y）, odulf（L）がある。なお写本 A, O, B は彼の名を省略する。

55　Ansila：異読は Ansilam（OB）。他史料に知られない人物。

56　Ediulf：Mommsen 版（L：odulf を除く全写本）。Grillone 版 Ediuulf は Achiuulf と同様の理由での修正だが, やはり写本にはない。なお Mommsen 版アパラトゥスは Etediulf なる読みを提案する（理由は不明）。*PLRE*, I: 276 も参照（『ゲティカ』該当箇所への言及のみ）。

57　Vultuulf：異綴りに uultulf, uulftul（O）, uuldulf, uul*duf（B）, uulf(f)uulf（A）。

58　Hermenerig: これは写本 H, P, L, A, X, Y の読みで, 異読として ermenerig（V）, hermerich（B）, ermerich（O）。4 世紀後半の王エルマナリクを指すとされる（*PLRE*, I: 283; *DNP*, s.v. “Ermanarich”; *ODLA*, s.v. “Ermenaric”; *RGA*, s.v. “Ermanarich”）。ここでは彼はアマルの系譜に位置づけられているが, これはヨルダネスの創作かもしれない。カッシオドルス『雑纂』11.1.19 では, エルマナリクはアマルの系譜には存在していない。この人物については『ゲティカ』81, 116–120, 129–130, 246–247 も参照。

59　Valaravans: クラス I。異綴りとして uualarauans（XYZ）, ualerauans（クラス II）。*PLRE*, I: 929（『ゲティカ』該当箇所への言及のみ）。

60　“Valarauans; Valarauans autem”：クラス I。異読は “uualarauans uualarauans enim”（XYZ）, “ualerauans ualerauans autem”（クラス II）。

61　“Vinitharium Vinitharius” : Grillone 版・Mommsen 版。異読は “uinithiarium uenetharius”（HPV）, “uuinthiarium uenetharius”（L）, “uuinitarium uuinitharius”（O）, “uuinitharium uuinitharius”（S）, “uenitarium uenetarius”（X）, “uenitarium uenitarius”（Y）, “uuinnitharium uuinnitharius”（B）, “uinitarium et ipse”（A）。このウィニタリウスについては『ゲティカ』246–249 でその事績が扱われており, カッシオドルス『雑纂』11.1.19 がその公正さを称賛する（“VVinitarius aequitate”; *PLRE*, I: 968）。

てウィニタリウスはウァンダラリウスをもうけた。80．ウァンダラリウス[62]はテウディミル[63]とウァラミル[64]とウィディミル[65]をもうけた。テウディミル[66]はテオデリクス[67]をもうけた。テオデリクスはアマラスエンタ[68]をもうけ，アマラスエンタは夫エウタリクス[69]とのあいだにアタラリ

62　“Vandalarium. Vandalarius genuit...”：写本には厳密にこの通りの読みはなく，Mommsen 版アパラトゥスによる異読は以下の通り：“vandiliarium vandalarius (vandalariu P) genuit”（HPV），“vandiliarium vandiliarius (uuandiliarium uuandiliarius Y; uandilarium uandilarius Z) enim genuit”（XYZ），“uuandaliarium uuandaliarius genuit”（L），“uuandalarium patrem”（A），クラス II 写本群では省略。ただし Grillone 版アパラトゥスは Mommsen 版と異なり，写本 L の読みとして uandalarium を挙げる。なお uandil(i)arius の綴りについて，Grillone 版アパラトゥスはカッシオドルス『雑纂』3.38（テオドリック王の書簡）の名宛人である Vuandil の名を参照させている。このウァンダラリウスについては『ゲティカ』251–252 および *PLRE*, II: 1148–1149 を参照。

63　Theudimir：Grillone 版。写本には厳密にこの通りの読みは無く，Mommsen 版は Thiudemer（HPV）。異読は他に thiudimer（LX），theudimer（Y），theodemir（SB），thodemir（O），tiudemer（A）。テウディミルは 465 年頃から 474 年頃の王で，兄弟と共にゴート人を率いた（*PLRE*, II: 1069–1070）。カッシオドルス『雑纂』11.1.19 がその敬虔さを称賛する（“Theudimer pietate”）。

64　Valamir：写本 H，P，V，X。異綴りに ualamer（Y），uualamir（LSOB），ualaemir（A）。447 年頃から 465 年頃の王（*PLRE*, II: 1135–1136; *RGA*, s.v. “Valamir”）。カッシオドルス『雑纂』11.1.19 がその誠実さを称賛する（“VValamer fide”）。フン人の王バランベルとの同一視については『ゲティカ』130 も参照。

65　Vidimir：写本 H, P, V, L, X。異綴りに uuinimir（O），uidemir（A），uuidemir（B），uuidimir（S），uindimir（YZ）。451 年頃から 473 年頃の王（*PLRE*, II: 1164; *RGA*, s.v. “Valamir”）。

66　Theudimir：初出時と同様厳密には写本に無い読み。。Mommsen 版は thiudimir（HPV）。異読：thiudimer（LX），theudimer（Y），thiudemir（A），theodemir（SOB）。

67　“Theodericum; Theodericus”：異綴りはなし。写本 A では qui であり，関係代名詞でつないでいる。東ゴート王テオドリックその人を指す（『ゲティカ』翻訳（1）24 節訳註 118 参照）。カッシオドルス『雑纂』11.1.19 がその知恵を称賛する（“sapientia […] inclitus pater”）。

68　Amalasuentha（?–535 年）。アマラスウィンタとも呼び習わされる。異綴りとして amalasuenta（OS），amalasuinta（B）も見られる。なお写本 A のみ “amalasuentham quae fuit mater”（「テオデリクスはアマラスエンタをもうけ，彼女は母親となって夫エウタリクスとのあいだに …」）と読む。幼少の息子アタラリクスに代わり，526 年から 534 年にかけて政務を執った。その統治は同時代人から賢明と評されたが，親ローマ的姿勢・政策がゴート人の反感を買い，534 年に即位した王テオダハドによってラヴェンナから追放，のち殺害された（*PLRE*, II: 65; *ODLA*, s.v. “Amalasuintha”; *RGA*, s.v. “Amalaswintha (Amalasuentha)”; ヘリン 2022）。

69　Eutharicus は写本 H，P，V，L に基づく読み（“de Eutharico”）で，いくつかの写本は前置詞を名前の一部とみなしている：deutharico（A），deutherico（OB），deuthari（S）。写本 X，Y，Z は “de atharico”。アマル家に連なる人で，515 年にアマラスエンタと結婚，519 年にはコンスルにも就任したがテオドリックよりも先に亡くなった（*PLRE*, II: 438; *CLRE*: 572–573）。

クス[70]とマテスエンタ[71]をもうけた。

81．次のようにして彼〔エウタリクス〕の家系が彼女〔マテスエンタ〕と結びついた。[M81] すなわち上述したアキウルフ[72]の息子ヘルマナリクス[73]がフニムンドゥスをもうけた。そしてフニムンドゥス[74]がトリスムンドゥス[75]をもうけた。またトリスムンド[76]がベリムンドをもうけ，ベリムンド[77]がウェテリクスをもうけ，このウェテリクス[78]がエウタリクスをもうけた。彼〔エウタリクス〕はアマラスエンタ[79]と結婚して，アタラリクスとマテスエンタ[80]をもうけた。アタラリクスは幼いうちに死亡し，ウィティギス[81]がマテスエンタと夫婦になった。彼女は彼から子供

70　Athalaricum：異綴りに athalricum（PYZ），athallaricum（B），athiaricum（X），athalarici（A）。テオドリックの死後幼くして王位を継いだが，病により 534 年 10 月に亡くなった（*PLRE*, II: 175–176）。

71　Mathesuentham：写本 X による読み。Mommsen 版 Matesuentham（HPVLZ）。異綴りとして mathesuentam（Y），matesuentam（SOB），athesuertiae（A）。『ゲティカ』翻訳（1）まえがき註 6 ならびに *RGA*, s.v. “Matasuntha” を参照。

72　Grillone 版 Achiuulf は写本に見られないので，Mommsen 版 Achiulf を採用する。他に achliulf（Y），achiulfi（O）。*PLRE*, I: 9 を参照。

73　このヘルマナリクスは，『ゲティカ』79 のヘルメネリク（エルマナリク）と同一人物を指すとされる（当該節の註を参照）。ここでの異綴りは hermericus（OB），hermaneribus（Z），hermanarig（A）。

74　“Hunimundum; Hunimundus”：写本 A は “huminundum et ipse”。東ゴート王。『ゲティカ』248 にも登場。カッシオドルス『雑纂』11.1.19 に言及され，その容姿を称賛される（“Unimundus forma”; *PLRE*, II: 573–574 (Hunimund 1); *RGA*, s.v. “Hunimund”）。アンミアヌス・マルケリヌス『歴史』31.3.1–3 が提示する系譜とは異なる（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 261 n. 316）。

75　Thorismundum：Mommsen 版では Thorismundo。他に thorismund（L），thorismundum（AOBXY）。東ゴート王で，『ゲティカ』250 で再び登場する（*PLRE*, II: 1116 (Thorismud); *RGA*, s.v. “Thorismund”）。またカッシオドルス『雑纂』11.1.19 がその貞潔さを称賛する（“Thorismuth castitate”）。ヨルダネスがここで描く系譜については，Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 261 n. 317）参照。

76　Thorismund uero：他に thorismundus uero（VB）。また写本 A では qui であり，関係代名詞でつないでいる。

77　“Berimund, Berimund”：写本 B, Y の読み。Mommsen 版は “Berimud: Berimud”（HVLXZ）。他の写本も berimund ないし berimud の組み合わせからなるが，写本 A は berimundum 一語。『ゲティカ』174, 175, 251, 298 でも言及される。

78　“Vetericum; Vetericus”：異読として “uuidericum uuidericus”（OB），uetericum（A）の綴りも確認される。『ゲティカ』251 で言及（*PLRE*, II: 1157）。

79　Grillone 版は写本 X，Y の表記（Amalasuenthae）を，Mommsen 版は Amalasuintha（HPV）を採用している。他に amalasuente（O），amalasuintae（B），amalasentae quae（A）。本稿訳註 68 参照。

80　Grillone 版は異読を挙げていないが，写本 V，L，X，Y の表記である Mathesuentham を採用する。Mommsen 版は前節における綴り Matesuentha とは異なる Mathesuentam（HPAOB）の表記をとる。

81　Vitigis：uuidicis（O），uuidechis（B）の綴りも見られる。東ゴート王（在位 536–549 年：*PLRE*, III: 1382–1386; *RGA*, s.v. “Witiges”）。

を授かることなく[82]，二人はベリサリウス[83]によって同時にコンスタンティノープルに連行された[84]。ウィティギスがこの世を去ると，ユスティニアヌス帝のいとこでパトリキウス[85]のゲルマヌス[86]が彼女を妻としてめとり，正規のパトリキア[87]にした。彼は彼女から，名を同じくするゲルマヌス[88]をもうけた。そしてゲルマヌスが死ぬと彼女は寡婦にとどまることに決めた。アマル家の王権[89]がどのような方法でいかにして破壊されたかについては，主が助け給うならば，私たちはしかるべき箇所で[90]述べることにしよう。

82．しかし今は脱線したところへと戻って，私たちが述べているところの民（ゲンス）の連なり[91]が，どのようにしてその旅路の終着点に達したのかを示そう。実際，歴史家アブラウィウスが語るには，ポントゥスの縁には，スキュティアのうち彼ら〔ゴート人〕が住む場所と私たちが語った地だが[92]，そこで彼らのうち東岸部を占め，オストロゴタが指導していた人々は，その人の名前にちなんで，あるいはその場所つまり「東部」にちなんでオストロゴタエと呼ばれた。その一方，他の人々はウェセゴタエ，すなわち西部であるゆえに［そう呼ばれた］[93]。

82　Mommsen 版の “de quo” を採用する。Grillone 版は “de qua” に修正するが，これは数行下に，“de qua et genuit filium” として，主語を男性とする同様の表現があり，それと一致していたはずだと考えるからである。しかし写本に根拠はない（Grillone 2017: 70 n. 351 参照）。Grillone 版に基づけば「彼は彼女から子供を授かることなく」。

83　Belisario：Grillone 版はクラス II 写本の読みとしてこの綴りを挙げる。Mommsen 版はクラス I，III の belesario（HPVLXY）を採用する。クラス I や III でも belisario（A），bel.（X）の異読があるほか，Mommsen 版アパラトゥスに基づけば，クラス II でも bellisarium（O），belisarium（B）の綴りが見られる。ユスティニアヌスのもとで活躍した将軍（*OCD*, s.v. “Belisarius”; *DNP*, s.v. “Belisarios (Βελισάριος)”; *ODLA*, s.v. “Belisarius”）。

84　540 年の出来事とされている。

85　Patricius：かつては世襲の称号であったが，コンスタンティヌス帝以降むしろ個人に与えられるようになった最高級の名誉称号のひとつ。東ローマ帝国／ビザンツ帝国では 10 世紀まで最高位の役人や将軍に与えられた（*ODLA*, s.v. “patricius”; 真川 2016: 47–50）。

86　*PLRE*, II: 505–507.『ゲティカ』314 にも登場。

87　“Patricia ordinaria” というタームはヨルダネスに独自とされ，Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 261 n. 324）によれば，特別な法的含意はない。

88　*PLRE*, III: 528 (*GERMANVS* 3).

89　Regnum：英語訳は「支配」（rule）。ドイツ語訳は「王国」（Reich），フランス語訳は「王権」（royauté）。なお，regnum については，文脈に応じて「支配（権）」などと訳した箇所もある。

90　『ゲティカ』315 も参照。

91　“ordo gentis”：現代語訳のニュアンスはそれぞれに異なる。それぞれの訳文のみ挙げると，英語訳 “the nation”，フランス語訳 “le bon arrangement de la nation”，ドイツ語訳 “die Reihe des Geschlechts”，イタリア語訳 “le generazioni del popolo”。

92　『ゲティカ』38, 42 も参照。

93　「オストロゴタエ」（いわゆるオストロゴート，東ゴート）および「ウェセゴタエ」（ヴィジゴート，西ゴー

XV．83．そしてすでに上述したように，彼らはドナウを渡ってからしばらくのあいだモエシア[94]とトラキアに住み着いた[95]。彼らのうち［そこに］残った者のなかには，ママエア[96]の息子[97]であるアレクサンデル[98]のあとの皇帝であるマクシミヌスもいた[99]。というのも，シュンマクスが彼の歴史書の第5書でそのように述べているからである[100]。彼が言うところでは，「マクシミヌス・カ

ト）の起源譚については『ゲティカ』42 および翻訳（1）42 節訳註 192 も参照。アブラウィウスに帰されるこの記述については Van Hoof & Van Nuffelen（2020: 141–143）参照（以下の記述はこれに概ね依拠する）。「オストロゴート」なる呼び名の史料上の初出はおそらく 4 世紀末の『ローマ皇帝群像』「クラウディウス伝」6.2（ただし Austrogothi のかたち）で，他方「ヴィジゴート」は 6 世紀にようやく現れる。それぞれの名前を居住地の地理的関係に求める語源説明の正しさをめぐっては議論がある。

94　「モエシア」（Moesiam）の綴りを伝えるのは写本 B のみで，大多数の写本は「ミュシア」（Mysia ないしそれに近い綴り）を伝えている。文脈上は「モエシア」が正しいが，両者の混同については『ゲティカ』翻訳（1）38 節訳註 177 を参照。なお，この単語に付された Grillone 版のアパラトゥスは不正確であり注意を要する。

95　『ゲティカ』38 を参照。なおこの一文の機能については Galdi（2018: 1122）も参考になる（文冒頭の “et quidem...” を “et quia...” と読む場合）。

96　ユリア・アウィタ・ママエア：カラカラ帝の従姉妹（*OCD*, s.v. “Iulia Avita Mamaea”; *DNP*, s.v. “Iulia [9] I. Abita Mamaea”; *RKT*: 174）。

97　Mommsen 版，Grillone 版ともに Mamaeae の綴りを採用するが，これは写本には確認されない。クラス I は Mamae を，クラス III は主として Mammeae を伝えており，また「息子」（filium）の語はクラス III のみが伝える（Grillone 版にはクラス I の読みが記載されていない）。Mommsen 版は filium を本文に採用していないが，英語訳は断りなくこの語を訳文に反映させている。

98　ローマ皇帝セウェルス・アレクサンデル（在位 222–235 年：*OCD*, s.v. “Aurelius (RE 221) Severus Alexander, Marcus”; *DNP*, s.v. “Severus [2] S. Alexander”; *RKT*: 171–173）。

99　ローマ皇帝マクシミヌス・トラクス（在位 235–238 年：*OCD*, s.v. “Iulius (RE 526) Verus Maximinus, Gaius”; *DNP*, s.v. “Maximinus [2] M. Thrax”; *RKT*: 176–177）。

100　マクシミヌス・トラクスの事績を伝える『ゲティカ』83–88 の内容は，小シュンマクスの断片として扱われている。彼は 476 年および 491 年のローマ首都長官（praefectus urbi），485 年にコンスル。『哲学の慰め』を著わしたボエティウスの義父でもあり，525 年に東ゴート王テオドリックの命令で処刑された。プロコピオス『戦史』5.1.32–39 では，テオドリックのその判断が間違いであったことが説明されている。シュンマクスの著作は現存しないが，全 7 巻の歴史書を著わしたとされる（*PLRE*, II: 1044–1046; *DNP*, s.v. “Symmachus [6] Q. Aurelius Memmius S.”; *ODLA*, s.v. “Symmachus, Q. Aurelius Memmius junior”; *CLRE*: 504–505）。『ゲティカ』83–88 が現存する唯一の断片で，その文言には『ローマ皇帝群像』「二人のマクシミヌス伝」およびオロシウス『異教徒を論駁する歴史』との類似が見られる。シュンマクスの史書がカッシオドルスによって引用され，さらにヨルダネスがそれを孫引きしたと想定できる一方で，ヨルダネス自身がシュンマクスの史書を直接参照したとも

エサルは，アレクサンデルの死後軍隊によって皇帝とされた」。彼はトラキアの低い身分の両親の元に生まれ，父はミッカ[101]という名のゴート人で，母はアババと呼ばれたアラン人[102]であった[103]。彼は3年間統治したが，キリスト教徒に武器を向けた際に，帝国と生命を同時に失った[104]。84．すなわち彼は，セウェルス帝[105]が統治し，息子の誕生日を祝っているとき，幼年期を過ぎ，農村生活の後に牧草地から軍隊に入った。元首が軍事競技を提供していたときのことであった。これを知ったマクシミヌスは，半ば蛮族の青年であるとはいえ，褒賞が提示されていたので，故郷の言葉で皇帝に熟練の兵士たちと戦う許可を与えてくれるよう懇願した。85．セウェルスは体格の大きさに非常に驚いて（というのも，言われるところでは，彼〔マクシミヌス〕の背の高さは8ペース以上もあった[106]），従軍商人[107]と組討ちするよう彼に命じた，粗野な男によって兵士たちに不当な仕打ちが加えられないようにするために。するとマクシミヌスは16人の従軍商人を非常に首尾よく打ち倒し，一人ずつ負かしたので，あいだに休憩を挟むこともないほどであった。こうして彼は褒賞を得て，軍務に就くよう命ぜられ，彼には騎士の勤務が最初となった。

それから三日目のこと[108]，皇帝が練兵場に現れたとき，彼〔マクシミヌス〕が蛮族のようにはしゃ

考えられる（Van Hoof & Van Nuffelen 2020: 146–165）。

101　Micca：クラスIとクラスIIIはこの綴りを伝えるが，クラスIIはやや異なる（mecca B; neca O）。

102　Alana：クラスIIと写本Aがこの読みを伝え，クラスIとIIIはhalanaないしhelanaを伝える（Mommsen版はHalanaを採用する）。『ローマ皇帝群像』「二人のマクシミヌスの生涯」1では，この母の名は「ハババ Hababa」である。

「アラン人」はスキュティア・サルマティア地方の遊牧民の様々な連合体を指す名称。共和政末期のローマ側史料に初出，以降8世紀に至るまで戦士集団として言及される。古代末期には黒海北部に住んでおり，4世紀末にフン人支配下に入ったがその後分裂し，一部は406年末にヴァンダル人，スエビ人と共にライン川を渡りガリアに入った。コーカサス地方に残った集団もあり，6世紀にはペルシアと提携しつつ東ローマ帝国と敵対した（*OCD*, s.v. “Alans”; *DNP*, s.v. “Alanoi”; *ODLA*, s.v. “Alans (Ἀλανοί, Alani)”; *RGA*, s.v. “Alanen”）。

103　マクシミヌスの出自について，最も古い史料のひとつであるヘロディアヌス『マルクス帝没後のローマ史』6.8.1は，彼がトラキアの外れの「半蛮族」の家庭の生まれであると述べている。ヨルダネスの叙述までを含めた詳しい分析としてMoralee（2008）を参照。

104　オロシウス『異教徒を反駁する歴史』7.18–19.1–2，およびヨルダネス『ローマーナ』281も参照。

105　セプティミウス・セウェルス（在位193−211年：*DNP*, s.v. “Septimius [II 7] Imp. Caesar L. Septimius Severus Pertinax Augustus”; *OCD*, s.v. “Septimius Severus, Lucius (RE Severus 13)”; *RKT*: 149–152）。ここで言及される「息子」はゲタのこととされる。

106　「8ペース」はおよそ240 cm。

107　lixae：軍団兵に身の回り品を売っていた商人たちのこと。特定の軍団から業務を委託されることもあり，また軍団の遠征時には付き従うこともあった（Roth 1999: 93–101）。

108　“tertia posthaec die”：翌々日のこと。ローマ人は起点となる日を「一日目」と数えるので，「三日目（後）」は翌々日を指す。

ぎまわるのを見て，彼を抑え込んでローマ人の規律を教え込むように将校に命じた。すると当人〔マクシミヌス〕は，元首が自分のことを話しているのを知ると，彼〔皇帝〕に近づいて，馬に乗った皇帝を徒歩で先導し始めた。86．すると皇帝は，ゆっくり走るよう馬に拍車をかけ，あちらこちらで何周も[109]，彼が疲れ果てるまで様々に転回させ続け[110]，それから彼に言った。「トラキアの小童よ，走ったあとに格闘する元気はあるかね」。彼は答えた。「皇帝が望むままに」。するとセウェルスは馬から降りて[111]，彼と戦うようにと非常に溌溂とした[112]兵士たちに命じた。だが彼は非常に精悍な 7 人の若者たちを地面に叩きつけ，事前に一呼吸おくことも全くないほどであった。そして彼ただ一人がカエサルから銀の褒賞と金の首飾りの両方を賜ったのである。そうして彼は，その体躯の美しさゆえに，護衛の一人として皇帝のそばに立つよう命じられた[113]。
87．その後，アントニヌス・カラカラのもとで[114]，彼は部隊を指揮し，そしてその行いによってしばしば名声を広め[115]，自らの努力に対する報奨として多数の軍事階級や百人隊長職を得た。だがその後マクリヌスが統治し始めると[116]，彼は軍事奉仕を 3 年近く拒絶し，将校の栄誉に与っていたものの決してマクリヌスの眼前に現れることがなかった。それはその人の帝権が，悪事を行うことで獲得されたゆえに，相応しくないと考えたからである[117]。88．それからエリオガバル

109　“multos orbes”：Mommsen 版は写本 P, H, O に現れる urbes を採用するが，文脈上考えにくいように思われる。英語訳とドイツ語訳もここでは orbes を採用する。

110　Grillone（2017: 335 n. 366）によれば，この箇所はウェルギリウス『アエネーイス』5.584–585 が意識されている可能性がある：「対称の位置どりを保ちつつ，輪と輪を交互に／絡み合わせ，武具をまとった模擬戦を始める」（岡・高橋訳。原文は “aduersi spatiis, altemosque orbibus orbis / impediunt pugnaeque cient simulacra sub armis”）。

111　descendens：クラス III と「二人のマクシミヌスの生涯」の読み。クラス I と II は desiliens（「馬から飛び降りて」）。

112　“recentissimos milites”：イタリア語とフランス語訳は「新参兵」の意味で訳している。英語訳は「元気のある，若い」（fresh），ドイツ語訳は「最強の」（stärksten Soldaten）。

113　この一文のテクストは “iussus deinde inter stipatores, decore corporis, principalis astare” だが，これはクラス III の読みで，読点は Grillone 版によるもの（Grillone 2017: 336–337 n. 369）。クラス I は “dedere corporis principalis”，クラス II と Mommsen 版は “degere corporis principalis”（「そうして彼は皇帝の護衛兵の一員として過ごすよう命じられた」）。英語訳は，Grillone 版の読みを “unlikely construction” として Mommsen 版をとる。なお並行する「二人のマクシミヌスの生涯」3 では「そして，皇帝の護衛兵としてこの先宮廷で仕えるように命じられた」（井上訳。原文は “iussusque inter stipatores corporis semper in aula consistere”）。

114　カラカラ帝（在位 211–217 年）のこと（*RKT*: 156–159）。

115　ウェルギリウス『アエネーイス』10.468：“famam extendere factis” を意識した文。詳しくは Van Hoof（2019: 177）を参照。

116　マクリヌス帝（在位 217–218 年）のこと（*RKT*: 162–163）。

117　「悪事」（facinus）とは，ここではカラカラ帝の殺害を指す。

ス[118]のもとへ, あたかも［エリオガバルスが］アントニヌス[119]の息子であったかのように帰順し，彼の将校の職を引き受けた。こののちママエアの［息子の］アレクサンデルのもと，パルティア人に対して驚くほど奮戦し，彼〔アレクサンデル〕がモゴンティアクム〔マインツ〕にて軍隊暴動によって殺されると，〔マクシミヌス〕自身が軍隊の選出によって元老院の決議なしで皇帝とされた。彼はその全ての美点を悪しき願いから[120]キリスト教徒迫害[121]において損なったが, アクイレイアにてプッピオ[122]によって殺され，支配権はフィリップス[123]に残された。

この私たちの小品にシュンマクスの歴史から借用したのは, 私たちが述べている民（ゲンス）〔ゴート人〕がローマ人の支配の頂点に達したことを示したいがためであった。その他に関しては，主題は私たちが話を逸らしたところへと，順序に従って戻るように求めている[124]。

XVI. 89. 実際にこの民（ゲンス）は，住んでいた地方，すなわちスキュティアの地のポントゥス沿岸[125]で素晴らしく輝いていて，紛れもなく多くの広大な土地，多くの海湾，多くの河川を有していた。

118　Eliogabalum：Mommsen 版（クラス I, III）。Grillone 版 Heliogagalum はクラス II（eliogabaum O; heliogabalo B）に基づく。ローマ皇帝エラガバルス（マルクス・アウレリウス・アントニヌス，在位 218–222 年）は，カラカラ帝の従姉妹であったユリア・ソアエミアスを母親とし，のちカラカラ帝の息子と称してマクリヌスとの内戦に勝利，皇帝となった。その治世は数々の醜聞で知られる（*OCD*, s.v. “Aurelius Antoninus (2), Marcus”; *DNP*, s.v. “Elagabal [2] Elagabalus= Imperator Caesar M. Aurelius Antoninus Augustus”; *RKT*:165–166; 新保 2000: 82–101）。

119　カラカラ帝を指す。

120　“malo uoto”：現代語訳はそれぞれに異なるニュアンスで訳している。英語訳 “on account of an evil resolution”「邪悪な決意のために」, フランス語訳 “pris d’un funeste dessein”「有害な企てにとらわれて」, イタリア語訳 “per la cattiva decisione”「邪な決意から」，ドイツ語訳 “durch ein schändliches Gelöbnis”「恥ずべき誓約によって」。

121　マクシミヌス・トラクス治世のキリスト教迫害については保坂（2008: 203）参照。

122　Puppione：Mommsen 版（HPVL）。Grillone 版 Pupieno は写本に根拠を持たない。他に pupione（OBXY），pupeiano（A^1）など。これはローマ皇帝プピエヌス（在位 238 年）を指す（*OCD*, s.v. “Caelius Calvinus Balbinus, Decius, and Clodius Pupienus Maximus, Marcus”; *DNP*, s.v. “Pupienus”; *RKT*: 183–184）。

123　ローマ皇帝フィリップス・アラブス（在位 244–249 年：*OCD*, s.v. “Iulius (RE 386) Philippus, Marcus”; *DNP*, s.v. “Philippus [2] Ph. Arabs”; *RKT*: 190–191）。

124　“exigit ut, ad id unde digressi sumus”：写本 O，B，X，Y の読み。Mommsen 版 “exegit, ad id, unde digressimus...”。ただし意味に大差はない。

125　Mommsen 版：“Ponti in litore Scythiae soli” を採用した。Grillone 版は soli を solo としているが，写本には根拠がない。ただし，意味に大差はない。

しばしばヴァンダル人[126]がその権力に屈し，マルコマンニ人[127]が貢納し[128]，クアディ人[129]の首長たちが隷属身分に落とされたほどである[130]。そして先述のフィリップスがローマ人たちを統治していたとき，彼は自身の息子[131]フィリップスとともにコンスタンティヌス[132]より前の唯一のキリスト教徒であり，その治世2年目にローマは千年目を終えたのであった[133]。かくしてゴート人は，当然のことながら[134]，その［ローマからの］貢物を撤回されたことに我慢ならず，友人から敵となっ

126　Vandalus：写本V，P，Nの読み。他にuuandalus（OBXY），guuandalus（L），gandalus（A），uanculus（H）。ヴァンダル人については，『ゲティカ』翻訳（1）26節訳註124参照。

127　単数形でMarcomannusと表記されているが，慣例に倣ってマルコマンニとした。もともとエルベ川沿いの共通の文化をもつ集団に属する人々で，マルクス・アウレリウス帝に対する2度の戦い（166−173年，177−180年）で有名（*DNP*, s.v. “Marcomanni”; *OCD*, s.v. “Marcoman(n)i”; *ODLA*, s.v. “Marcomanni”; *RGA*, s.v. “Markomannen”）。

128　Mommsen版：“sub praetio”，Grillone版：“sub pretio”（写本には根拠なし）については，解釈が分かれる。ここでは英語訳，イタリア語訳，ドイツ語訳と同じ解釈をとったが，フランス語訳は“parmi ses prises de guerre”（「彼の戦利品のひとつである」）とする。

129　もともとエルベ川沿いの集団に属し，マルコマンニ人とともにローマ帝国と戦い，その後ドナウ川国境のすぐ北に定住させられた。ガリエヌス帝の時代にパンノニアに侵入したが，アウレリアヌスによってイタリアから追い返され，さらにカリヌスによって打ち負かされた。357−358年にはスエビ人やサルマタエ人と共にバルカン半島に侵入した。374年にも再び侵入（*DNP*, s.v. “Quadi (Κούαδοι, Κουάδοι)”; *OCD*, s.v. “Quadi”; *ODLA*, s.v. “Quadi”; *RGA*, s.v. “Quaden”）。

130　ゴート人がヴァンダル人，マルコマンニ人，クアディ人を支配していたとするヨルダネスの記述を信頼する必要はないが，これらの民は150年以降ローマ帝国の北にあってローマに敵対していた。たとえば，カッシウス・ディオ『ローマ史』77.20.3は彼らをひとつの節のなかでまとめて言及している（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 264 n. 350）。

131　Grillone版：“eiusdem filio”（XYZ），Mommsen版：“idem filio”（HPVB）。Mommsen版アパラトゥスによれば，他に“id est filio”（O），“idem philippo”（L），写本Aでは欠落。フィリップス2世のこと（在位247−249年：*RKT*: 192−193）。

132　コンスタンティヌス1世（在位306−337年）。皇帝コンスタンティウス1世（副帝在位293–305年，正帝305–306年）の息子で，父親の死後軍隊により皇帝に推挙，マクセンティウス（在位306–312年）やリキニウス（後述）との内戦を経て324年に帝国を統一。都市コンスタンティノープルの創建者であり，キリスト教の保護を通じて西洋世界の宗教的転換期をもたらしたことで有名（*OCD*, s.v. “Constantine I, ‘the Great’ (Flavius Valerius Constantinus) (RE 2)”; *DNP*, s.v. “Constantinus [1] C. I.”; *ODLA*, s.v. “Constantine I the Great”; *RKT*: 286–291）。邦語で読める伝記としてジョーンズ（2008）やランソン（2012）がある。

133　ヒエロニュムス『年代記』217c−d。ヨルダネス『ローマーナ』283は，治世3年目としている。

134　“ut adsolet”は定型表現で，『ゲティカ』94, 123, 134, 138, 169にも見られる（Grillone 2017: 78 n. 375も参照）。なお英語訳は「慣例のように貢物が撤回された」として，この一節が貢納の撤回にかかると解釈する。

たのである。なぜなら彼らは，王たちのもと遠く離れて[135]暮らしていたとはいえ，ローマ国家の同盟者であり，毎年の贈与を受け取っていたからである[136]。

90．多くを述べる理由があろうか。当時オストロゴタは彼の配下と共にドナウを渡り，モエシアとトラキアを荒廃させた。彼に勝利すべく[137]，元老院議員デキウス[138]がフィリップスによって送り出される。到着した彼〔デキウス〕はゲタエ人に対し決して優位に立つことが出来ず，自らの軍団に公務を免除して私人の暮らしを送らせる[139]ようにしたので，あたかも彼らの無視によってゴート人はドナウを渡ったかのようであった。彼が思った通りに[140]彼〔オストロゴタ〕の配下に対する報復がなされてから，彼はフィリップスのもとに引き返した。しかし兵士たちは，自分たちがあれほどの労苦ののちに除隊されるのだと悟って，腹を立ててゴート人の王オストロゴタの兵[141]のもとに逃げ込んだ。

135　remoti：英語訳とイタリア語訳は「遠く離れて」とするのに対して，フランス語訳は「別々に」とする。ドイツ語訳は「ローマから遠く離れて」とするが，「ローマから」は補いであって，訳者の解釈に基づいている。

136　ゴート人は 3 世紀半ばにはローマの同盟者ではなかった。238 年から 271 年にかけて，ドナウ川の南と小アジアでゴート人その他による侵入が相次いだのはたしかなようである（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 265 n. 353）。3 世紀におけるゴート人の動向については，井上（2013）参照。

137　debellandum：写本 A にのみ見られる読み。その他のクラス I およびクラス III は rebellandum を伝え，これを採用する Mommsen 版に従えば「彼に対抗するために」と訳される。

138　のちの皇帝デキウス（在位 249–251 年）。248 年にフィリップス帝からドナウ方面の軍権を委ねられたが翌年皇帝に推戴，フィリップスを敗死させた（*OCD*, s.v. “Messius (RE9) Quintus Decius, Gaius”; *DNP*, s.v. “Decius [II 1] C. Messius Quintus Traianus D.”; *RKT*: 195–197）。

139　“vitae privatae degi” : Mommsen 版（クラス I）。Grillone 版 “uitam priuatam degere” は写本に基づかない（ただし degere のみ写本 A，B にある）。また，“vitae privatae” の訳をめぐって現代語訳の解釈は割れている。 英語訳・フランス語訳・イタリア語訳は「私人の」ないし「民間人の暮らし」のように解するが（“private lives”, “la vie civile”, “alla condizione di comuni cittadini”），ドイツ語訳は「彼らの故郷へと帰らせた」としている（“ließ sie in ihre Heimat zurückkehren”）。ここでの “vitae privatae” は「公務」（militia）との対比を念頭に置いた表現と考えられるので，前者の訳をとった。帝政後期の militia については *ODLA*, s.v. “militia” を参照。

140　“ut putauit”：写本 H，P，V，L の読み。Mommsen 版は “ut puta”（BXY），英語訳はこれを utpote と解するという断りを入れて “as much as possible” と訳している（「可能な限り彼らに対する報復がなされてから …」）。

141　“ad ... auxilium”：現代語訳の解釈が分かれている。オストロゴタの兵力と解するのは英語訳 “to the forces”。一方，その他は抽象的な「支援」「助け」と解している（イタリア語訳 “per aiuto”, フランス語訳 “assistance”, ドイツ語訳 “in den Beistand”）。

91．彼らを受け入れ彼らの言葉によって奮起した彼〔オストロゴタ〕は，すぐさま 3 万人の兵隊[142]を編制して戦いへと向かったのだが，彼のもとに少なからぬタイファリ[143]とアストリンギ[144]だけでなく，さらに 3 千のカルピ[145]も加わった。この人間たちの集団（ゲヌス）は戦いに極めて秀でており，しばしばローマ人に敵対していた[146]。とはいえ後のディオクレティアヌス[147]とマクシミアヌス[148]の治世に，ガレリウス・マクシミヌス[149]・カエサルが彼らを打ち負かしローマ国家に服従させることとなる[150]。さて，それらに彼はゴート人[151]とペウキニ（ポントゥスに注ぎ

142　“xxx milia uirorum”：この読みをとるのはクラス II のみで，他の写本群と Mommsen 版では「30 万人の彼の（集団の）者たち」（“ccc/trecenta/tricenta milia suorum”）である。Grillone（2017: 340–341 n. 383）は，後続のカルピの人数（3 千人）との比較からクラス II を採用しているだけであり，この選択には議論の余地が残る。新出のデクシッポス断片を踏まえたより慎重な分析として Mitthof（2020: 321–327）を参照。

143　Taifalis：クラス I および写本 N の読み。写本 N 以外のクラス III は tuifalis，B 写本は taiphas（ただし Mommsen 版のアパラトゥスでは，taiphas O; taiphis B）。タイファリはゲルマン系（ないしサルマタエ系）の一派とされ，しばしばゴート系のテルヴィンギと協力関係を築いていた。370 年代後半に帝国内に入り敗北したあと，イタリア北部とガリアに定着したとされる（*ODLA*, s.v. “Taifali”; *DNP*, s.v. “Taifali”; *RGA*, s.v. “Taifalen”）。

144　Astringis：写本群は揃ってこの形を伝えるので，Grillone 版による修正である「アスディンギ」（Asdingis）は採用しない。この集団は一般にはヴァンダル系のハスディング（ハスディンギ）に同定される（*RE*, s.v. “Asdingi”; *DNP*, s.v. “Vandali”; *RGA*, s.v. “Hasdingen”）。

145　Carporum：クラス I の多くとクラス II，N 写本がこの形を伝える一方，クラス III の多くは caporum の読みをとる。カルピはダキア周辺に居住していた集団で，3 世紀中葉以降 4 世紀初頭に到るまで幾度かローマ帝国と争った（*ODLA*, s.v. “Carpi”; *DNP*, s.v. “Carpi”）。

146　“qui saepe fuere Romanis infesti”：写本 B では動詞が現在形 sunt になっており，写本 O ではそれが省略されている。

147　ローマ皇帝ディオクレティアヌス（在位 284–305 年：*RKT*: 257–260）。

148　“et Maximiano”：クラス II 写本では省略されている。ローマ皇帝マクシミアヌスのことで（在位 285–305, 307–310 年：*RKT*: 262–265），ディオクレティアヌスとマクシミアヌスによる共同統治は 286–305 年。

149　Maximinus：この形はクラス I と III の主要写本に現れ，一方でクラス II ほか数写本は maximus を伝える。文脈上では「マクシミアヌス」（Maximianus）が正しく，Grillone 版はそのように修正するが，写本に例証されないことから採用しない。

150　ここで述べられる「ガレリウス」は，ヨルダネスの典拠と思しきオロシウス『異教徒を反駁する歴史』7.25.9, 12 にあるように，後のローマ皇帝ガイウス・ウァレリウス・マクシミアヌス・ガレリウス（在位 305–311 年）のこと（*RKT*: 272–275）。ヒエロニュムス『年代記』226b によれば，この出来事は 293 年のこととされる。

151　ここでオストロゴタの軍勢に再び「ゴート人」が加えられているのは一見奇妙である。ひとつの解釈として，ここでの典拠となったテクスト（デクシッポス？）では，この軍勢を率いたのはカルピで，それら

込むドナウの河口に横たわるペウキス島から）を加えて[152]，自らの民（ゲンス）のなかで最も高貴な指揮官[153]であるアルガイトゥスとグンテリクスを長とした[154]。92．すぐさまドナウを渡ってモエシア[155]を再び掠奪した彼らは，その地域の都市で傑出した州都のマルキアノポリス[156]を攻撃して長期間包囲し，そしてそこに暮らす人々から金銭を受け取ると撤退した[157]。
93．さて私たちはマルキアノポリスの名前を挙げたので，その建設[158]についていくらか短く説明

にゴート人（とペウキニ）が加わったという記述であったのが，『ゲティカ』ではゴート人が戦いを主導した形に改変された結果，このようになったのだという説がある（Boteva 2020: 195–198 の議論を参照）。近年発見されたデクシッポス『スキュティカ』の新出断片では，オストロゴタは「スキュティア人の長」であった（Grusková & Martin 2014: 35; Martin & Grusková 2020: 546）。

152　“Peucinos ab insula Peucis”：Grillone 版によれば，クラス I とクラス II がこの読みをとる一方，クラス III は揃って「ペッキニ」（peccinos），「ペッキス島」（“insula peccis”）と読む。一方 Mommsen 版によれば，クラス II の読みは I，III とは異なる（pesicenos ... paucis O; pesinceos ... paucis B）。ペウキス島はストラボン『地理誌』7.3.15 に登場する，ドナウ川河口のペウケ島を指す（*DNP*, s.v. “Peuke”）。ペウキニはストラボン『地理誌』7.3.15 が説明するところでは，『ゲティカ』74 にも現れるバステルナエ（バスタルナイ）の別名（ないし一派）で，またプリニウス『博物誌』4.100 では，ゲルマン人の五つの種族のひとつとして「ペウキニとバステルナエ」（“Peucini, Basternae”）が挙げられている（*DNP*, s.v. “Peucini, Peuci”）。なお Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 266 n. 361）はプリニウスがペウキニをヴァンダル人に含めていると説明しているが，これは誤読と思われる。

153　ductores：これはクラス III，写本 B，および V の訂正にみられる読みで，クラス I の大半と写本 O，そして Mommsen 版では doctores（「指導者」）。

154　“Argaithum et Gunthericum”：写本間で綴りに大きな差は見られない（AOB のみ argaitum）。両者の名前は他には確認されない。すでに Mommsen が註記していたように，『ローマ皇帝群像』「三人のゴルディアヌスの生涯」31.1 において，ゴルディアヌス 3 世の治世（238–244 年：*RKT*: 187–188）に「スキュティア人の王アルグントが，近隣の人々の諸王国を荒らした」（桑山訳）とあり，ここで述べられるアルガイトゥスと同一人物であると推測されている。Boteva（2001: 41;2020: 198）が推測するように，アルガイトゥスはトラキア系（ないしダキア系，つまりカルピ）の，そしてグンテリクスはゴート系の出自かもしれない。Martin & Grusková（2022）によるデクシッポス『スキュティカ』新出断片では Γουθούρικ(ος) という人物が現れており，関連が注目される（Martin & Grusková 2022: 470–472, 483–484 の議論を参照）。

155　モエシアはしばしばミュシアと混同されるが，ここでは写本間の異同はない。『ゲティカ』101 も同様である。

156　マルキアノポリス（現在のデヴニャ，ブルガリア）は下モエシアの首府で，『ゲティカ』93 で説明されるように，トラヤヌスの治世に彼の娘（ないし姉妹）の名をとって創建された（*ODLA*, s.v. “Marcianopolis”）。

157　マルキアノポリス包囲戦の時期は，かつては 248 年とされることが多かったが，Boteva（2001）の分析により，現在では 250 年ないし 251 年が優勢である。新出のデクシッポス断片も踏まえた研究として Mitthof（2020）を参照。関連する記述として，デクシッポス『スキュティカ』F22（Martin 2006）＝ F28（Mecella 2013）。

158　situs：英語訳とドイツ語訳は「位置」（location, Lage），フランス語訳は「状況」（situation）とするが，文

するのが良いだろう。実際にトラヤヌス帝[159]は，この町を以下のようにして築いたと言われている。すなわち，その姉妹で若い娘マルキア[160]が，とても透明かつ美味な水でその町の中心から湧き出るポタモスと呼ばれる川で沐浴し，水を汲もうとしたとき，彼女は持っていた黄金の壺を，金属の重みのせいで深みに落としてしまい[161]，その後それ〔壺〕が長い時間がたってから底から浮き上がってきたと。たしかに空の壺が［水に］呑み込まれたり，ましてや，ひとたび呑まれた後，波によってはじき出されたりするのは普通のことではなかった。トラヤヌスはこれらを驚異的なこととみなし，何か神的なものがその泉に宿っていると考え，この都市を建設して，姉妹の名にちなんでマルキアノポリスと名付けたのである[162]。

XVII．94．さてそれから，私たちが話していたように，長い包囲ののちに，このゲタエ人[163]は受け取った戦利品で裕福になって故地へと戻った。至るところですぐさま勝利し戦利品で裕福になった彼を見たゲピドの民（ナティオ）は，嫉妬に導かれ，親類に対して武器を向けた。

いったいどのようにゲタエとゲピドが親類であるのか君が問うならば，短く説明しよう[164]。私

脈からイタリア語訳（fondazione）が適切と判断した。

159　在位 98−117 年（*DNP*, s.v. “Traianus [1]”; *OCD*, s.v. “Trajan (Marcus Ulpius Traianus)”; *RKT*: 116–119）。

160　Grillone 版：“Marcia soror sua puella”（XYZ），Mommsen 版：“Marciae sororis suae puella”（「その姉妹マルキアの娘」）。姉の Ulpia Marciana のことか（*DNP*, s.v. “Marciana”; *OCD*, s.v. “Ulpia Marciana Augusta”; *RKT*: 119–120）。

161　Grillone 版：“casu uas aureum quod ferebat, in profundum decidit metalli praegrauatum, longeque…” と Mommsen 版とでは読点の位置が異なっており，後者は，“casu vas aureum quod ferebat in profundum decidit, metalli pondere praegravatum longeque…” とする。Mommsen 版に従う英語訳は，「彼女は深みにもっていった黄金の壺を落としてしまった。その壺は金属の重さに引きずられて［下に落ちると］，長い時間がたってようやく下から現れた」と解釈する。

162　この逸話を語るのはヨルダネスのみである。アンミアヌス・マルケリヌス『歴史』27.4.12 は，この町がトラヤヌスの姉妹に因んで名付けられたとしている。Mommsen（1882: 82 n. 1）は，ヨルダネスがここでアンミアヌスの失われた巻を用いたとするが，Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 267 n. 367）によれば，典拠がアンミアヌスに遡るとは限らない。むしろ，ギリシア語で「川」を意味する普通名詞 potamos が河川名になっていることは，ギリシア語の史料が誤解された結果であると想定する。またデクシッポス『スキュティカ』F22（Martin 2006）＝ F28（Mecella 2013）が，マルキアノポリスがトラヤヌスの姉妹に因んで名付けられたとしていること，同 F24（Martin 2006）＝ F30（Mecella 2013）がフィリッポポリスの説明で始まることから，ヨルダネスにおける諸都市の説明の情報のいくつかがデクシッポスに由来する可能性を指摘する。

163　Geta：ゲタエ Getae の単数形。ここでは「ゲタエ人であるオストロゴタ」を指すと解釈した。

164　同時代の叙述であるプロコピオス『戦史』3.2 は，ゴート系の民としてゴート人，ヴァンダル人，ヴィジ（西）ゴート人，そしてゲピド人を挙げ，かつてそれらをゲタイと呼ぶ者もいたと述べる。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 268 n. 368）は『ローマ皇帝群像』「プロブスの生涯」18.2 がゲピド人をゴート人およびヴァンダル人と結びつけていると述べるが，そのような記述は見当たらない（むしろ『ローマ皇帝群像』「神君クラウディウスの生涯」

が冒頭で述べたことを思い出したまえ，つまりスカンザ[165]島の内奥からゴート人が王ベリグ[166]と共に出ていったこと，たった3隻の船でこちら側の大洋の沿岸，つまりゴティスカンザ[167]へとやってきたことを[168]。［M95］その3隻のうち1隻は，よくあるように遅れて到着したのだが，それがこの民（ゲンス）に名を与えたと言われる。95．すなわち，「遅い」は彼らの言葉で「ゲパンタ」と言われており[169]，ここから徐々にかつ崩れて[170]，彼らに対して非難を込めて「ゲピダエ」[171]という名が生まれたのである[172]。たしかに彼らもゴート人の血統に由来するが，私が述べたように，「ゲパンタ」は何か遅いものや鈍い[173]ものを指すので，ゲピド人の名前が謂われのない非難から生まれたとするのは，大きく間違っているとは私は思わない。というのも，彼らは知性においてより遅れており[174]，体の動作においてより鈍重だからである。
96．さて，嫉妬に動かされたこれらゲピド人は，長いあいだ［人々から］蔑まれていた属州[175]で，

6.1–2 のことか）。

165　Scandzae：Grillone 版が採用する Scandiae は写本には見られない。Mommsen 版の採用する Scandzae（HPVAX）に従う。『ゲティカ』9，16，23 も参照。

166　Berig：Grillone 版は，おそらくは『ゲティカ』25 に現れる「ベリグ Berig」（O［berg］を除く全写本）に合わせてこの表記を採用したと考えられるが，実際のところ，本節における表記は写本によって様々である：berich（OB, Mommsen），berig（YZ），berice（HPVL），berige（LA）。

167　“id est Gothiscandza”：Grillone 版が採用する Gothiscandia は写本に例証されないため採用しない。この文章はクラス II では省略されている。

168　『ゲティカ』4, 25 を参照。「3 隻の船」という情報はここが初出である。Devillers（1995: 145 n. 149）はこの数字に象徴的な意味を読み取り，3 という数字がゴート系の主要な三つ（ヴィジゴート，オストロゴート，ゲピド）を示唆するとか，あるいはゴート人の移住段階（スカンディナヴィアからの出発，黒海沿岸への入植，帝国への進出）を示唆すると述べるが，史料の裏付けに乏しい（cf. Grillone 2017: 290 n. 137）。

169　gepanta。なお Mommsen 版の区切りに従えば，「… と言われていたからである」。

170　corrupte：英語訳は「不正確に」，フランス語訳は「若干の変化を被って」，イタリア語訳は「形が変わって」。ドイツ語訳では訳されていない。単なる音声上の変化を指すのか，あるいは「不正確に」というニュアンスが込められているのか不確かである。

171　Gepidae：写本 A，B，X，Y の読み。Mommsen 版は Gepidas（HPVL）。Mommsen 版のアパラトゥスによれば，他に gepide（O）の綴りも見られる。

172　Grillone 版と Mommsen 版では読点の位置が異なるが，意味に変化は生じない。

173　tardus。なお『ゲティカ』118 では，ゴート人の安定さと鈍重さ（tarditas）がヘルリ人を屈服させたとする。

174　“tardioris ingenii”：ingenium の訳については英語訳（“slower in intelligence”）を優先したが，「体の動作」と対比されているので，むしろ精神や心に近い意味合いともとれる。実際にドイツ語訳（“von langsamem Geist”），イタリア語訳（“mente piuttoto tarda”）はそのように訳す一方，フランス語訳に従えば，「より怠惰な性質であり」（“caractère plus indolent”）となる。

175　“dudum spreta prouincia”：写本 B の読み。Mommsen 版 “dum Spesis provincia” はクラス I，「属州スペシスで … 住んでいたのだが」と訳せる。ただし，Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 268 n. 372）によれば「スペシス」

ウィスクラ川[176]の浅瀬に囲まれた島に住んでいたのだが，そこを彼らは故郷の言葉で「ゲピドイオス」[177]と呼んでいた（言われているところでは，今ではその島にはウィウィダリア[178]族（ゲンス）が住んでいて，彼ら自身〔ゲピド人〕はより良い地域に移ったという。このウィウィダリイ人[179]は様々な集団（ナティオ）から，あたかもひとつの避難所に集められたかのようにして民（ゲンス）をなしたことが知られている[180]）。97．それゆえ私たちが述べていたように，ゲピド人の王ファスティダ[181]は穏やかな民（ゲンス）を駆り立てて，故郷の境界を武力で押し広げた。すなわちブルグンド人[182]をほとんど根絶やしにするほどに殺し，他の少なからぬ民（ゲンス）を征服したのである。彼〔ファスティダ〕は同様にゴート人を悪意をもって[183]挑発し，血縁による同盟を不適切な争いで初めて破った。彼は非常に傲慢な驕りによって思い上がって，増えていく民（ポプルス）〔ゲピド人〕に土地をもたらし始めたあいだに，その土地の住人を減らしていった。
98. 次いで彼はオストロゴタへ使節を遣った。その当時もなお，オストロゴタエもウェセゴタエも，

なる地域名は他に知られない。また「属州」と訳した provincia は，ここではローマ帝国の行政区分としての「属州」ではなく「地方」を意味すると思われる。『ゲティカ』翻訳（1）48 節訳註 219 も参照。

176　現ヴィスワ川。『ゲティカ』17, 31, 34, 36 に言及される「ウィストゥラ川」と同一の河川。『ゲティカ』35 も参照。

177　Gepidoios：写本 A，X，Y，Z の読み。クラス I（HPVL）は gepedoios。この地名について Mommsen は Muellenhoff の説として「ゲピド人の湿地」という意味を紹介している（Mommsen 1882: 163）。

178　Vividaria：Mommsen 版（他に uiuidarii V; uuidaria B）。Grillone 版 Vidiuaria は写本に基づかないが，『ゲティカ』36 で uidiuarii の読みがクラス I，III に見られる（そこでのクラス II は uidioarii）。本稿訳註 179 も参照。

179　Vividarii：Mommsen 版（uuidarii B を除く全写本）。Grillone 版 Vidiuarii は写本に基づかない（本稿訳註 178 も参照）。

180　『ゲティカ』36 は「ウィディウァリイ」（Vidivarii）なる集団について本節とほぼ同じ話を伝えており，おそらく同一集団を指すのであろう。ゲピド人の移動先については『ゲティカ』33 で，ドナウ川およびその支流とフルタウシス川（現プルト川？）に囲まれた地域とされている。

181　他史料には知られない人物。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 54）はその名が「嫌悪」「尊大な」を意味するラテン語 fastidium を想起させることから，実在への疑念を呈する。

182　Burgundzones：Mommsen 版（クラス I および N）の読み。Grillone 版 Burgundiones（= Giunta & Grillone 1991）は写本に基づかない（『ゲティカ』161 も見よ）。他の読みは burgonziones（OB），burgozones（XYZ）。ブルグンド人は 2 世紀以降に言及され始める人々で，5 世紀半ばにはローマ帝国領内，現サヴォワ近郊に居住地を与えられた。彼らはフランク王国や東ゴート王国とその勢力を競い，最終的に 530 年代にフランク人に敗れた（*OCD*, s.v. “Burgundians”; *DNP*, s.v. “Burgundiones”; *ODLA*, s.v. “Burgundians and Burgundian kingdom”; *RGA*, s.v. “Burgunden”）。

183　male：訳に解釈の幅がある。ファスティダの主観と解するか（英語訳 “with evil intent”，フランス語訳 “à mauvais escient”），あるいは客観的に見て悪い方法で，という意味にとるか（イタリア語訳 malamente「悪く」，ドイツ語訳 heftig「猛烈に」）。

つまり同じ民（ゲンス）に属する両方の人々（ポプリ）が[184]，彼〔オストロゴタ〕の権力に服属していた。彼〔ファスティダ〕は，自身が山々の荒々しさに遮断され，また森林の濃密さで身動きがとれないことに文句を言い，彼〔オストロゴタ〕に対し戦争かあるいは彼の土地の一部か，二つのうちひとつを用意するよう要求した。99．そのときゴート人の王オストロゴタは，揺るぎない精神の持ち主だったので，使節に次のように答えた。彼はこうした戦を恐れており，戦は激しいものとなり，そして武器をとって近親者[185]と戦うのはまったく忌まわしいものとなるだろう，だが土地は譲らないと。それ以上何を［言えようか］。ゲピド人たちは戦へと突き進み，オストロゴタは，より劣っていると判断されないよう彼らに向かって進軍し，両者はアウハ川[186]がそのそばを流れるガルティスの町[187]で対峙し，そこでどちらも非常に勇敢に戦った。なぜなら，同様の武器と戦い方が両者を動かしていたからである[188]。けれども，より優れた大義と鋭敏な知性[189]がゴート人を助けた。［M 100］ついにゲピド人側が跪き，夜が戦を中断させた[190]。
100．そして彼の配下の者たちの虐殺を尻目に，ゲピド人の王ファスティダ[191]は故地へと急ぎ，かつて驕りによって思い上がっていたのと同じくらい，恥ずべき不名誉によって貶められたのだった。ゲピド人が撤退するのに満足したゴート人は，勝利者として帰還し，彼らの指導者としてオストロゴタがいるあいだは彼らの故郷で幸せに[192]平和な暮らしを送った[193]。

XVIII．101．彼〔オストロゴタ〕の死後，クニウァが軍を二つに分け，少なからぬ数を，モエシ

184　“utrique eiusdem gentis populi”：クラス I の多く（と Mommsen 版）は gentes と読む。

185　propinqui：英語訳のみ「隣人」（neighbours）とする。

186　Auha：他に eucha（O），aucha（B），hauua（XYZ）の表記も見られる。詳細は不明。

187　Galtis：他に gautis（L），caltis（A）の表記も見られる。ルーマニアの Galati の可能性が指摘されている。

188　『ゲティカ』261 では，ゴート人の典型的な武器が槍であり，ゲピド人は剣であったとされている。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 269 n. 378）は，pike とすべきところを spike としており，誤植である。

189　“uiuiacitasque ingenii”:『ゲティカ』95 参照。ちなみに 95 節で ingenium に「知性」の訳語を与えた英語訳は，ここではドイツ語訳と同じく「精神」（spirit）とするのに対して，95 節で「心」を用いたイタリア語訳は「知性」（ingegno），フランス語訳は一貫して「性質」（caractère）とする。

190　“proelium nox diremit”：フランス語訳は「夜が兵士たちを分けた」とする。

191　Fastida：ここで正しい綴りを伝えているのはクラス II である。なお，Mommsen 版では写本 A でこの単語が欠落とするが，Grillone 版では写本 T で欠落とする。

192　feliciter：クラス II ではこの単語の代わりに nostri と綴る。

193　このエピソードは伝統的には 291 年のこととされていたが（Wolfram 1990a: 67–68），Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 269 n. 379）はオストロゴタの実在が（新出のデクシッポス断片によって）249–250 年頃に確認されたことを根拠に，仮にこのエピソードを史実として扱うならば 3 世紀半ばとする（『ゲティカ』79 の註を参照）。一方で Wolfram（2020: 20 ほか）は，3 世紀半ばにおけるオストロゴタの存在を認めつつも，このエピソードの（基となった出来事の）年代を 290 年頃に留めおくことも可能であると議論している。

ア[194]を荒すべく派遣した[195]。というのも怠惰な元首たちのおかげでそこが防衛者を欠いていることを知ったからである。彼自身はというと，7万人[196]を率いてオエスキア[197]，すなわちノウァエへと上った[198]。そこで将軍ガッルス[199]によって退けられた彼は，ニコポリスに到達した[200]。そこはイアトルス川近くに位置しており，非常に名高く，サルマタエを征服した後にトラヤヌスが建設し，「勝利の町」と名付けたところである[201]。そこへ皇帝デキウスがやって来たところで，クニウァはようやく，それほど離れていないハエムス[202]の地域へと撤退し，それから軍備を整えてフィリッ

194　Moesiam :『ゲティカ』ではしばしばモエシアはミュシアと混同されるが，ここでは全写本が一致して moesia の綴りを伝えている。『ゲティカ』92 も同様である。

195　Cniua :『ゲティカ』ではオストロゴタの後継者として登場するクニウァは，新出のデクシッポス断片においてはオストロゴタと同時期の指導者として登場する。デクシッポスはこの 2 名のうちクニウァを「王」（βασιλεύς）と呼び（Martin & Grusková 2014b: 736 and cf. 743; Martin & Grusková 2020: 546），オストロゴタを「長」（ἄρχων）と呼ぶ（Grusková & Martin 2014: 32; Martin & Grusková 2020: 546）。『ゲティカ』101–103 で詳述されるクニウァのフィリッポポリス攻撃（250–251 年頃）については，デクシッポスの新たな断片を踏まえた今後の再検討が待たれる（さしあたり Grusková & Martin 2015; Brodersen 2020; Mitthof 2020 を参照）。

196　lxx：クラス III では「8 万人」（lxxx/octoginta）。この数字については Mitthof（2020: 322）を参照。

197　Oesciam：Grillone 版のアパラトゥスでは，クラス I が euscesium，クラス II と III が eustesium とされる。一方 Mommsen 版のアパラトゥスでは eustesiam（クラス III の XYZ），eustesium（クラス II），euscesium（クラス I の HPV）などの異読が載せられている。Mommsen 版では『ゲティカ』102 に出てくる表記を参照して Eusciam と訂正している。Grillone 版はプリニウス『博物誌』3.149 に現れる「オエスクス川」（Oescus）を元に Oesciam の表記を採用している。写本に現れる綴りはいずれも崩れた形であり，いずれかに優位性を認めることも難しいため，本訳では Grillone 版による修正案を採用する。この場所はオエスクス Oescus としても知られ，現在のドナウ川沿い，ギゲン（ブルガリア）に位置した（*DNP*, s.v. “Oescus [2]”）。本稿訳註 198 も参照。

198　“id est Novas conscendit” : ここでは写本群に忠実な Mommsen 版に従った。Grillone 版は「さらにはノウァエに上陸した」（“item Nouas conscendit”）と訂正するが，写本に例証されない。「上った」（conscendit）の動詞について Grillone（2017: 342–343 n. 403）は，クニウァが黒海沿岸から（ドナウ川流域の）街々へと「上った」と解釈している。ノウァエはドナウ川沿いの，現在のスヴィシュトフ（ブルガリア）近郊に位置したとされる（*DNP*, s.v. “Novae [1]” の記述はやや不正確なので注意）。オエスクスから東に 70km ほどで，ともに下モエシアに属する（プトレマイオス『地理学』3.10.5 を参照）。両者ともドナウ流域における交通の要衝だった（Soustal 1991: 139–140）。

199　このガッルスは，後の皇帝ガイウス・ウィビウス・トレボニアヌス・ガッルス（在位 251–253 年）のこと（*DNP*, s.v. “Trebonianus Gallus”; “Volusianus [1]”; *OCD*, s.v. “Vibius (RE 58) Trebonianus Gallus, Gaius”; *RKT*: 200–201）。

200　この一文（“unde ... accedit”）は，クラス III の写本群には見られない。

201　このニコポリスは Nicopolis ad Istrum として知られる街で，現在のヴェリコ・タルノヴォの北方 20km ほど（ブルガリア）に位置した（*DNP*, s.v. “Nikopolis [2] ad Istrum”; Soustal 1991: 376–377）。イアトルス川はドナウ川の右支流で，現在のヤントラ川に相当する（*RE*, s.v. “Ieterus”; プリニウス『博物誌』3.149）。

202　Haemi：Grillone 版はクラス I と III がこの綴りだとするが，Mommsen 版では Hemi となっている。「ハエ

ポポリスへと急行した[203]。102．皇帝デキウスは彼の撤退[204]を知って，その同じ都市に救援をもたらすことを切望し，ハエムス[205]山脈の尾根を越えてベロエア[206]に赴いた。彼〔デキウス〕がそこで騎馬と疲労した歩兵隊を休ませていたあいだに，まさにその地でクニウァがゴート人とともに稲妻のように襲い掛かり，ローマ軍を壊滅させ，皇帝を，逃げることのできた僅かな手勢とともに再びオエスキア[207]まで，アルプス[208]を越えてモエシア[209]まで追い払ったが，そこでは当時辺境域の将軍であったガッルスが非常に多くの戦力とともに留まっていた。彼〔デキウス〕はそこから，またオエスクス[210]からも軍隊を集め，将来の戦争での戦闘に向けて準備を整えた[211]。
103．実際にクニウァは，長いあいだ包囲していたフィリッポポリスに攻め入って[212]，略奪品を得て，デキウスと戦うことを見込んで[213]，そこにいた将軍プリスクス[214]と同盟を結んだ。彼らがデ

ムス」は，今日のブルガリア中央を東西に走るバルカン山脈のこと（*DNP*, s.v. “Haimos”）。

203　フィリッポポリスは現ブルガリアのプロヴディフに位置した街（*ODLA*, s.v. “Philippopolis”; *DNP*, s.v. “Philippopolis”）。なお本節に関連する記述として，ゲオルギオス・シュンケロスに引用される，デクシッポス『スキュティカ』F17（Martin 2006）＝F23（Mecella 2013）も参照。

204　recessum：Grillone 版および Giunta & Grillone（1991）のこの読みは写本 N に基づく（ただし XYZ は recessu）。Mommsen 版 secessu（HPV）をとる場合「彼の出発について知って」と訳される。

205　“iugo Haemi”：Mommsen 版 “iugum Hemi” は写本になく，写本の読みは “iugo hemi”（AXYZ），“iugum enim”（HPV）など。また Haemi/Hemi の読みはここでも Grillone 版と Mommsen 版で食い違う（本稿訳註 202 参照）。

206　Beroeam：写本 H，P，V，A の読み。Mommsen 版は Beroam（BO）。アウグスタ・トラヤナとも呼ばれた都市で，現在のブルガリア中西部の都市スタラ・ザゴラにあたる（*DNP*, s.v. “Beroia (Βέροια) [2] In Thrakien”; *ODLA*, s.v. “Stara Zagora (ancient Beroea, Augusta Trajana of Thrace)”）。

207　Oesciam：Mommsen 版 Eusciam（HVO）。本稿訳註 197 も参照。

208　ここではイタリア半島北部のアルプス山脈ではなく単に高い山脈の意，すなわちハエムス山脈のことを指している（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 270 n. 389）。

209　Moesiam：写本 A，B の読み。Mommsen 版は Mysiam（HPV）。

210　Oesco：本稿訳註 197，207 も参照。都市オエスキア／オエスクスを指す。Mommsen 版は Vsco（HPVL）を採りつつ，アパラトゥスで Oescus を指すと断っている。

211　“se parat in aciae”：Mommsen 版（HPVL）をとる。Grillone 版 “se reparat in acie” はクラス II の “reparat in aciae”（O），“reparat aciem”（B）のように reparat を読む写本（および N）を参照しているが，se と reparat を同時に読む写本はない。

212　フィリッポポリスへの攻撃の占領（250 か 251 年）は，新たに発見されたデクシッポスの断片に詳述されている（Martin & Grusková 2014b; Grusková & Martin 2015; Grusková & Martin 2017b; Martin & Grusková 2020: 545–546）。アンミアヌス・マルケリヌス『歴史』31.5.17 も参照。

213　“quasi cum Decio pugnaturum”：ここではフランス語訳に近い訳し方をした。Galdi（2013: 476）によれば quasi は目的を表現する接続詞であり，英語訳はこれに従って「デキウスと戦うために」と訳す。ただし，Galdi 以前に既にドイツ語訳者（Martens 1913: 35; Möller 2012）も同様に訳している。

214　トラキア総督ユリウス・プリスクスのことで，ゴート人に占拠されたフィリッポポリスで軍によって皇

キウスとの戦いのためにやって来ると，ただちに矢で傷を負った［デキウスの］息子に残忍な最期を迎えさせた[215]。彼〔デキウス〕はそのことを知って，兵士たちの魂を励ますためであるとはいえ，次のように述べたと言われている。「誰も悲しまなくて良い。ひとりの兵士の喪失は，国家の衰退ではない」。けれども彼は，父親としての感情を堪えきれず，敵中に攻め入り，［彼らの］死あるいは息子の復讐を切望し，モエシアの町アブリトゥス[216]までやって来た。［そして］ゴート人たちによって包囲されて，彼自身も殺害され，その支配と人生を終わらせた[217]。今日そこは「デキウスの祭壇」と呼ばれており，彼は憐れにも[218]戦の前にそこで偶像に生贄を捧げていたのであった。

XIX．104．かくしてデキウスが死ぬと，ガッルスとウォルシアヌス[219]がローマ人に対する支配権を手に入れた。そのときペストの疫病[220]が，私たちがこの 9 年前に経験した[221]のとほとんど同じ運命をもたらし，全世界の表面を汚したのだが，とりわけアレクサンドリアとエジプト全域を

帝として宣言されるが，都市の引き渡しをめぐる混乱の中で死亡（*DNP*, s.v. “Priscus[1]”; *RKT*: 199; Piso 2020: 346–349）。

215　ウェルギリウス『アエネーイス』4.308。「酷い最期で（“crudeli funere”）死を迎えようとする」（岡・高橋訳）。なお本文は Mommsen 版の区切りに基づいて訳した。Grillone 版は，“Venientesque ad conflictum ilico Decii, filium…confodiunt” として Decii と filium のあいだに読点を入れて，「デキウス家の人たちが戦いにやって来て，［ゴート人たちが］その息子を殺した」と訳すが，同じ区切りを採用する Giunta & Grillone（1991）を底本とするフランス語訳は，われわれと解釈を同じくする。

216　下モエシアの Abritus。写本により Abrittus のように，t が重なる場合もある。*DNP*, s.v. “Abrit(t)os (Ἄβριττος)” によれば，ブルガリアのラズグラトから 2km 東に離れた地。ヨルダネス『ローマーナ』284 にも言及。

217　この戦いについてはヒエロニュムス『年代記』218h，カッシオドルス『年代記』956 も参照。

218　Grillone 版 : miserabiliter（BXY）。Mommsen 版 : mirabiliter（クラス I と O 写本）。英語訳とドイツ語訳は，Mommsen 版にしたがって，「奇妙な仕方で」と訳す。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 271 n. 398）によれば，この一文はこの地域に関するヨルダネスの知識を表している可能性がある。

219　ローマ皇帝ウォルシアヌス（在位 251–253 年），父ガッルス（本稿訳註 199 参照）と共同皇帝（*DNP*, s.v. “Volusianus [1]”; *RKT*: 201–202）。

220　いわゆる「キュプリアヌスの疫病」のこと（本稿訳註 223 も参照）。250 年頃から 10 年以上にわたってローマ帝国各地を襲った疫病については，麻疹，天然痘あるいはウイルス性出血熱の可能性が指摘されているが，定かではない（マクニール 2007: 上 193–202; 土井 2015; Harper 2017: 136–145; プライザー＝カペラー 2020: 104–105; 南雲 2022: 262–264）。なお Martin & Grusková（2022）によるデクシッポス『スキュティカ』新出断片にも，この疫病の記事が発見された。

221　いわゆる「ユスティニアヌスの疫病」は，541 年エジプトのペルシウムに現れ，542 年半ばにコンスタンティノープルで猛威を振るった。プライザー＝カペラー（2020: 105–108）の紹介によれば，ペスト菌の発生源はチベット高原で，536 年から始まる寒冷期という条件のもとで交易路を通じて西へと広まった。

荒廃させた。歴史家ディオニュシウス[222]はこの災禍について涙ながらに説明している。それ〔災禍〕を，私たちのキリストの尊敬すべき殉教者で司教であるキュプリアヌスが，「死を免れないことについて」と題する書のなかで書いている[223]。105．当時またアエミリアヌスなる人物が[224]，怠惰な元首たちのおかげでゴート人がしばしばモエシア[225]を破壊するのを許しており，国家が多大な犠牲を払うことなしには何者にも［それを[226]］押し戻すことができないと判断して，また［そうすることで］同じように彼の幸運へと至ることができると考えて，モエシア[227]で僭主の地位を手に入れ，そして全軍を手中に収めて，諸都市と人々を破壊し始めた。彼に対する膨大な軍備が進められている数ヶ月のあいだに，彼は国家に対し少なからぬ障害をもたらした。彼はしかし，その非道な企てがまさに始まるやいなや死に，生命と自身が切望していた[228]帝権の両方を失った[229]。

106．その一方，先述の皇帝たちガッルスとウォルシアヌスは，帝位に就いてようやく 2 年が経とうとしていたが，この世から去った。しかし彼らがいたまさにその 2 年は[230]，彼らはどこであ

222　歴史家ではなく，アレクサンドリア主教ディオニュシオス（在位 248−265 年）のこと（*DNP*, s.v. “Dionysios [52]”）。ここで言及されているのはエウセビオス『教会史』7.21–22 に引用される彼の書簡であろう。その書簡は 249 年，250 年に疫病に襲われたアレクサンドリアの様子，キリスト教徒による病人の献身的看護を語っている。

223　キュプリアヌスはカルタゴ司教（在位 248−258 年：*DNP*, s.v. “Cyprianus [2] C. Thascius Caecili(an)us”; *OCD*, s.v. “Cyprian (Thascius Caecilinus Cyprianus)”; *ODLA*, s.v. “Cyprian of Carthage”）。その著作『死を免れないことについて』において（8, 14, 16 など）この災禍について記述されている。この疫病は彼の名にちなんで「キュプリアヌスの疫病」とも呼ばれている。

224　後の皇帝アエミリアヌス（在位 253 年の春から夏：*RKT*: 203）のこと。

225　Moesiam：写本 A，X がこの綴り。他には maesiam（Y），mysiam（その他および Mommsen 版）。なおクラス II 写本ではこの単語は省略。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 272 n. 403）はゾシモス『新しい歴史』1.28 においてアエミリアヌスがアシアに侵入したスキュティア人に対抗したとの記事を根拠に，この箇所は史実としてモエシアとミュシアのどちらも可能性があるとする。だがそのゾシモス自身の記述では，アエミリアヌスによる戦闘の地は限定されておらず，また彼はパンノニアの司令官とされていることから，小アジア方面まで彼が軍勢を率いたかどうかには大きな疑問が残る。

226　ここでは「押し戻す」（remoueri）対象が明示されていないが，フランス語訳とともに「ゴート人」を押し戻すと解釈した。ドイツ語訳のように，「これ〔ゴート人の侵攻〕を妨害する」という解釈もありうる。

227　Moesia：写本 L，B がこの綴り。他には mesiam（O），mysia（Z），mysiam（その他）。Mommsen 版は，ここでは Grillone 版と同じく Moesia を採用する。

228　inhiabat：クラス II 写本では inuadebat である。

229　本節に関連する記事としてヒエロニュムス『年代記』219f–g を参照。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 272 n. 405）は，『ゲティカ』103–109 がヒエロニュムスとデクシッポスを利用したのではないかと推測している。

230　“quo affuerunt”：写本 L，A，X の読み，Mommsen 版 “quod affuerunt”（HPVY）。Mommsen 版に従う英語訳はここでの quod を時間文を導く（國原 2007: 105 参照）用例と解して「2 年のあいだは」と訳し（したがっ

れ平和な，どこであれ信望のある支配を行なった，彼らの幸運のなかで唯一とみなされた例外，すなわち病の蔓延を除いては[231]。しかしこれは，他人の生を嫉妬の歯でずたずたにするのが常である無知な者あるいは中傷者［の言うこと］によっている。すなわち彼らは支配権を得てから間もなく，ゴート人の民（ゲンテス）と同盟を結んだ[232]。ほどなくして二人の王が死ぬと，ガリエヌス[233]が元首の地位を獲得した。

XX．107．彼〔ガリエヌス〕はあらゆる遊蕩のために堕落したので，ゴート人の指導者であったレスパ，ウェドゥクスとトゥルアルス[234]は，船を用いて，ヘレスポントス海峡[235]を渡ってアシアに入った。彼らはそこでこの属州のたくさんの町を略奪し，アマゾネス人が建設したことを私たちが以前に述べた[236]，かのとても有名なエフェソスのディアナ神殿を炎上させ[237]，ビテュニアの諸地方へと進みカルケドンを破壊したが，そこをのちにコルネリウス・アウィトゥス[238]が部分的に

て Grillone 版に基づく本訳文と結果的にほぼ同じ意味となる），その解釈の裏付けとして Galdi（2013: 387）を挙げている。

231　ヨルダネスによるこのようなガッルスとウォルシアヌスへの評価は，両皇帝をキリスト教迫害者として描くオロシウス『異教徒を反駁する歴史』7.21.4–6 とは対照的である。その理由を Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 272–273 n. 409）は直後に語られる皇帝とゴート人の盟約に求めている。またヨルダネスの記述とエウトロピウス『首都創建以来の略史』9.5 を対照させる土井（2015: 28–30）も参照。

232　ゾシモス『新しい歴史』1.24.2–25.1 がガッルスら皇帝とゴート人の和平に言及しており，Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 272 n. 407）はゾシモスとヨルダネスの共通史料をデクシッポスに帰している。

233　ローマ皇帝（在位 253–268 年）。共に皇帝となった父親ウァレリアヌス（在位 253–260 年）がペルシアの捕囚となったのち単独で帝国を統治した。その治世はライン・ドナウ方面での外敵襲来やいわゆるガリア帝国そしてパルミラの反乱といった政治的・軍事的事件への対処に費やされた（*DNP*, s.v. “Gallienus”; *OCD*, s.v. “Licinius (*RE* 84) Egnatius Gallienus, Publius”; *ODLA*, s.v. “Gallienus”; *RKT*: 209–211）。

234　いずれも他史料には言及されない人物。訳文では Grillone 版の索引に上がる主格形で示した。トゥルアルス（Thuruaroque：写本 HPVL。Grillone 版アパラトゥスではクラス I および N の読みとして t(h)uruaroque となっており N の読みが不明確）について異綴りとして turuaroque（A），taruaroque（XYZ），tharuaroque（O）。Mommsen 版は Tharuaroque と読む。写本 B は uarroque。なお彼らの名前の主格形に関して Mommsen 版は本文ではレスパ，ウェドゥコ，タルアロ（“Respa et Veduco Tharuaroque duces Gothorum...”）としつつ，索引ではそれぞれ Respa，Veducus，Tharuarus (cf. Thuruarus) としている。

235　Hellespontiacum：写本 A，X，Y の読みで，Mommsen 版は Ellispontiacum（VO を除く他写本）。ヘレスポントス海峡は現在のダーダネルス海峡を指す（*DNP*, s.v. “Hellespontos”）。

236　『ゲティカ』51。

237　エフェソスのディアナ（アルテミス）神殿炎上は『ローマ皇帝群像』「二人のガリエヌスの生涯」6 にも言及される。

238　Auitus：写本 A，B の読みで，Mommsen 版は Abitus（HPVOXY）。この人物は他の史料からは知られないが，『ローマ皇帝群像』「フィルムス，サトゥルニヌス，プロクルス，ボノススの生涯」15 は，皇帝アウレリ

復興させた。今日に至るまで，王都〔コンスタンティノープル〕への近さを享受しているとしても，それらの破壊の少なからぬ痕跡は［カルケドンの］繁栄の[239]しるしであり続けている。108. ゴート人は，彼らがかつてアシアの諸地方に入ったのと同じ幸運さで，略奪品と戦利品を手に入れて[240]ヘレスポントス海峡を再び渡り，その道中でトロイアとイリオン[241]を荒らし，かのアガメムノン[242]との戦争のあとほとんど修復されていなかったこれら〔トロイアとイリオン〕は，再び敵対する剣先によって破壊された。

アシアがこれほどまで破壊された後[243]，トラキアが彼らの獰猛さを経験することになった。すなわち，彼らは直ちにハエムス山の麓，海の近くにある町アンキアロス[244]，かつてパルティア人の王サルダナパロス[245]が海縁とハエムス山麓のあいだに築いた都市に近づいて攻撃したからである[246]。109. そして彼らはそこに何日も留まり，温水の浴場を楽しんだと言われている。そこはア

アヌス（在位 270–275 年：*RKT*: 225–227）がトラキア総督のガロニウス・アウィトゥスなる人物に宛てたとされる書簡を引用し，このアウィトゥス（こちらも実在は確認できない）がゴート人対策に関わっていたとする（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 273 n. 413 参照。ただし Van Nuffelen らはアウレリアヌスをウァレリアヌスと取り違えた上に在位年代も誤記している）。

239　potestatis：写本 X，Y，Z の読み。Mommsen 版 posteritatis（クラス I・II）をとると「のちの世代［にとって］の証拠」と訳される。

240　ウェルギリウス『アエネーイス』9.450：「ルトゥリ軍は勝利を収め，戦利品を分捕って手にしたものの」（岡・高橋訳）からの引用かもしれない（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 273 n. 415）。

241　“Troiam Iliumque”：他に “troiam hiliumque”（O），“ilium troiamque”（X）。トロイアとイリオン（イリオスとも呼ばれる）は同じ都市である。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 273 n. 416）によれば，誤りというよりは二詞一意であり，トロイア略奪をヨルダネスが強調したためである。小アジアへの攻撃はゾシモス『新しい歴史』1.35 に言及され，260 年以前のこととされている。

242　Agamemunoniaco：Grillone 版アパラトゥスによれば，クラス I 写本の綴り。クラス III は agamemniaco とされるが，Mommsen 版アパラトゥスによれば，クラス III の写本 X と Y では agamenniaco，クラス II の写本 O では agamennonlaco。ギリシア神話に出てくる英雄で，トロイア遠征軍の総大将である（*DNP*, s.v. “Agamemnon (Ἀγαμέμνων)”; *OCD*, s.v. “Agamemnon”）。

243　Mommsen 版では段区切りされていない。

244　Mommsen 版の Anchialos を採用する。Grillone 版の Anchialon は写本に見られず，他の地名綴りからの類推。写本 A では anchilialos。現ブルガリア南東，黒海沿岸のポモリエに比定される（*DNP*, s.v. “Anchiale [2] (Anchialos; Ἀνχίαλος)”）。

245　Grillone 版は Sardanapallus（LAOBY），Mommsen 版は Sardanaphalus（HPV），他に sardanapalus（X）。パルティア人の王ではなく，伝説上のアッシリア人の王である（*DNP*, s.v. “Sardanapal (Σαρδανάπαλ(λ)ος)”）。

246　ヒエロニュムス『年代記』82b。ヨルダネスはトラキアのアンキアロスとキリキアのアンキアレ（もしくはアンキアレイア）を混同している（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 274 n. 417）。

ンキアロス[247]の町から12マイルのところにあり[248], その燃える泉の底から［温水が］吹き出ていて，そしてそこ〔その温泉〕は全世界に数多ある他の温泉地のあいだで間違いなく抜きん出ており，病人の健康にとって極めて効果的である[249]。

XXI．110．それから，自分たちの故地へと帰還すると，彼らは後に皇帝マクシミアヌス[250]によって導かれて[251]対パルティア人用のローマ補助軍へと招かれた[252]。そこに大いに補助兵を与えて，彼らは献身的に戦った。しかし，カエサル・マクシミアヌス[253]が彼らの支援によってシャープー

247　アンキアロスおよびその近郊の温泉は，古代から古代末期にかけての叙述にしばしば登場する。ヨルダネスと同時代のプロコピオス『建築について』3.7.18–23 でも健康への効能が強調されている（Roques 2011: 220–221, 243–244）。地誌と史料については Soustal（1991: 175–177）を参照。

248　“duodecimo miliario”：約 18 km で，クラス II 写本では「15 マイル」（“quinto decimo”），つまり約 22 km。ここでの 1 マイル（miliarium）は “mille passus” と同義で 5 千ペース，つまり約 1.5km に等しい（『ゲティカ』75 を参照）。Schilbach（1970: 32–36）の調査では，1 マイルの距離はローマ期にもビザンツ期にも，1.5 km から大きく離れることはない。実際のところ，この温泉地に同定されているブルガリアのバネヴォは，アンキアロスから約 20 km のところに位置している（Soustal 1991: 477–478）。

249　“praecipuae et ... efficacissimae”：Grillone 版のアパラトゥスによれば，これはクラス II と III の読みであり，この文章の主語が「温泉」（thermae）であることを示す。クラス I（と Mommsen 版）は “praecipua et ... efficacissima” と読むが，その場合主語は「風呂」（lavacra）となる（Mommsen 版のアパラトゥスでは，以下のようにもう少し細かい異読が載せられている：precipua (praec– P) et … efficacissima HPV; precipua … efficacissima L; precipue et … efficacissimae AXY; precipue et … efficacissima Z; pr(a)ecipu(a)e … efficacissima(e) BO）。なお関連する記事としてゾシモス『新しい歴史』1.34 も参照（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 274 n. 418 は，ゾシモスとヨルダネスの共通要素から，『ゲティカ』109 までがデクシッポスに由来するのではないかと推測している）。

250　マクシミアヌス（・ヘルクリウス）帝のこと。『ゲティカ』91 を参照。

251　ducuntur：この読みは写本 N，Y およびクラス II 写本に基づく。Mommsen 版はクラス I の読みである rediguntur をとる。

252　『ゲティカ』109 までの出来事（268 年）から『ゲティカ』110（290 年代）においては，叙述の飛躍がみられるが，これはヨルダネス（あるいはカッシオドルス）が利用した史料が，デクシッポス（271 年ごろまで）からオロシウスに切り替わったことを示しているのかもしれないと Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 274 n. 420）は推測している。

253　Maximianus：これはクラス III の多くと写本 B の読みで，クラス I の多くと写本 O は maximinus とする。文脈上は，ガイウス・ガレリウス・ウァレリウス・マクシミアヌスを指す（一般にはガレリウス。293–305 年に副帝，305–311 年に正帝）。この人物は『ゲティカ』91 にも登場しているが，Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 274 n. 421）は，ここではヨルダネスがこの人物をマクシミアヌス・ヘルクリウスと混同しているのではないかと推測する。とはいえ，例えばクラス I 写本の多くはガレリウスを『ゲティカ』91 と 110 で一貫して Maximinus としており，同じく『ゲティカ』91 と 110 に登場するマクシミアヌス（・ヘルクリウス）とは区別されていることに注意せねばならない。

ル大王の孫でペルシア王のナルセ[254]を完膚なきまでに敗走させてその全財産と妻たち，そして息子たちを獲得し，ディオクレティアヌスがアレクサンドリアでアキレウス[255]を打ち負かし，そしてマクシミアヌス・ヘルクリウスがアフリカでクィンクエゲンティアニ[256]を破滅させたあとには，彼らは国家の平和を得て，ゴート人をほとんど無視するようになった[257]。

111．すなわち彼ら〔ゴート人〕なしでは，以前からローマ軍にとっては他のいかなる民（ゲンテス）との戦いも困難になっていたのである。すなわち彼らがいかに頻繁に要請されていたかは明白である。［例えば］コンスタンティヌスの支配下で要請を受け，彼の親類であったリキニウス[258]に対して武器を取り，彼〔リキニウス〕が敗れてテッサロニカに閉じ込められ，コンスタンティヌスの勝利によって帝権を奪われた彼を，剣で処刑したように[259]。112．なぜなら，彼〔コンスタンティヌス〕がきわめて有名でローマに比肩する都市を自分の名にちなんで建設したとき[260]，ゴート人の貢献があったからであり，彼らは皇帝と同盟関係に入り，様々の民（ゲンテス）に対抗するための支援として自らの中から4万人を差し出したのである。［同じ］人数からなる彼らの軍隊[261]は，今日でもな

254　ササン朝ペルシア第2代の王シャープール1世（在位240–270年）と，第7代の王ナルセ（在位293–302年）を指す。『ゲティカ』での表記はそれぞれSapor MagnusとNarseus。一般には，ナルセはシャープールの孫ではなく息子であるとされる。ガレリウスは297年の緒戦ではナルセに大敗するが，翌298年の戦いで勝利を収めた（*EIr*, s.v. “ŠĀPUR I”, “NARSEH”）。

255　アウレリウス・アキレウスは簒奪者ドミティウス・ドミティアヌスに協力し，297年に殺害された（*PLRE*, I: 9; *RKT*: 261）。

256　Quinquegentianos：写本L，A，X，Yがこの読みで，クラスIのその他（HPV）はquinquegentitianos，クラスIIはquinquangentian(n)os。ベルベル系の一派とされ，今日のアルジェリアの一部に居住していたが，マクシミアヌス・ヘルクリウスによって293年に撃退された（*DNP*, s.v. “Quinquegentiani”）。

257　想定される情報源として，オロシウス『異教徒を論駁する歴史』7.25.4–11およびヒエロニュムス『年代記』225e–228bを参照。また対応する記述としてヨルダネス『ローマーナ』300–301。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 275 n. 426）を参照。

258　皇帝リキニウス（正帝在位308–324年）。正帝セウェルス（在位306–307年：*RKT*: 278）の死後，四帝統治体制の混乱を収拾すべく308年11月に開催されたカルヌントゥム会談にて正帝に選ばれた。バルカン半島を拠点に帝国東方を統治し，当初はコンスタンティヌスと協力関係にあったものの次第に対立を深め，324年の軍事衝突に敗れて退位，翌年春テッサロニカにて処刑された（*DNP*, s.v. “Licinius [II 4] Valerius Licinianus L.”; *OCD*, s.v. “Licinius (RE 31a), Valerius Licinianus”; *ODLA*, s.v. “Licinius”; *RKT*: 282–283）。

259　ヒエロニュムス『年代記』231bおよびオロシウス『異教徒を論駁する歴史』7.28.20, 26を参照。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 275 n. 429）によれば，ゴート人がリキニウスに手を下したとするのはヨルダネス独自の伝承である。『コンスタンティヌス帝の生まれ』5.21はコンスタンティヌスとリキニウスの対立の発端がゴート人のローマ領侵入にあり，同27節は両皇帝の戦争において，リキニウスがゴート人の補助軍を得たことを伝える。

260　オロシウス『異教徒を反駁する歴史』7.28.27。ゴート人への言及は見られない。

261　“quorum et numerus et militia”：現代語訳はnumerusの解釈について態度が分かれている。英語訳（“their

お国家に名前を残している。すなわち同盟軍である。実際に彼らは，当時[262]彼らの王アリアリクス[263]とアオリクス[264]の支配のもとで繁栄し，彼ら〔王たち〕の死後，力と高貴さにおいて秀でたゲベリク[265]が王位の継承者となった。

XXII．113．なぜなら彼は，―― 祖父はオウィダ[266]，曾祖父はニダダ[267]―― 父ヒルデリク[268]から生まれ，その素晴らしい功績によってこの家系（ゲヌス）の栄誉に肩を並べたからである[269]。彼はすぐにその治世の最初の果実としてヴァンダル族（ゲンス）に対して支配を広げようと欲し，彼らの王でアスディンギ[270]一族のウィシマル[271]と対峙した（歴史家デクシッポスが伝えるところでは，この一族は彼ら〔ヴァンダル族〕のあいだで傑出しており，最も戦好きの集団（ゲヌス）であった。彼によれば，彼らはきわめて広大な大地を前にしながら[272]，1 年もかからないうちに大洋から私たちの［領域の］境界

---

unit and their service”）とイタリア語訳（“e questo contingente di soldati”）はそれを，帝政期のローマ軍の部隊として理解するのに対して，フランス語訳（“Ce corps, en nombre identique”）とドイツ語訳（“Ihre Zahl und Schlagkraft”）は，numerus を人数と考えているようである。

262　tunc：Mommsen 版に見られるこの語が，Grillone 版には欠落している。Grillone の見落としと判断し訳出した（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 275 n. 432 参照）。

263　Ariarici：他に arriarici（V）の綴りも見られる。*PLRE*, I: 102 を参照。

264　Aorici：他に adrici（H），atrici（XYZ）の表記も見られる。他にアオリクスに言及する史料は存在しない。*PLRE*, I: 80 を参照。

265　Grillone 版，Mommsen 版ともに採用する Geberich はクラス II の写本 O と B のみ。他に giberig（L），geberith（HVXY），giberith（PZ），giberiet（A）。ここでしか証明されない王（*PLRE*, I: 387）。

266　*PLRE*, I: 655 を参照。同じくここでしか証明されない。

267　Nidada：Grillone はクラス I, III の読みとするが，Mommsen 版アパラトゥスによれば，クラス I の写本 A では Midata。クラス II 写本は cniuida（OB）。ここでしか証明されない（*PLRE*, I: 631）。

268　Hilderich：Mommsen 版は Hilderith。Grillone が採用する Hilderich はクラス II の写本 O と B の読み。*PLRE*, I: 436 (Hilderith) を参照。

269　前節のゲベリクを含め，ヒルデリク，オウィダ，ニダダも『ゲティカ』79–81 でアマル家の祖先が列挙される際に言及されていない。Devillers（1995: 154 n. 191）を参照。

270　Asdingorum：他に asdringorum（Y），aspingorum（Z）。本稿訳註 144 参照。

271　Visimar：クラス I と III の大半の写本がこの綴りであるのに対して，クラス II では uuisumar。他に uisarmar や uisarma の綴りも見られる。この名前の王は『ゲティカ』にしか現れない。詳しくは『ゲティカ』114 および本稿訳註 281 を参照。

272　“prae nimia terrarium immensitate”：英語訳は prae を理由を示す前置詞として「その土地の広大さゆえに」と訳すのに対して，フランス語は「横断すべき土地の広大さにもかかわらず」とする。ドイツ語訳も「… ゆえに」ととるが，「大いに離れているがゆえに」と意訳する。イタリア語訳は “per la grande vastita delle terre percorse”。ここでは文脈から，フランス語訳に近い解釈をとった。

まで到達した[273]。その当時彼らは現在ゲピド人たちが住んでいるのと同じ場所, マリシア[274]川, ミリアレ[275]川とギルピル[276]川, そしてここに述べたすべてを凌ぐグリシア川[277]沿いにいた。114. というのも当時彼らの東方にはゴート人がおり，西方にはマルコマンニ人[278]が，北方にはヘルムンドゥリ人[279]が, 南方にはドナウとも呼ばれるヒステル［川］があったのだった[280]。そしてヴァンダル人がここで生活していたときにゴート人の王ゲベリクによる戦争が，前述のマリシア川沿いで生じた。そこで互角の戦いは長くは続かず, すぐさまヴァンダル人の王ウィシマルその人が, 彼の民（ゲンス）の大部分と共に降伏させられた[281]。

115. 他方でゲベリクは，ゴート人の並外れた指揮官であって，ヴァンダル人を破って略奪の限

273　デクシッポス『スキュティカ』F29（Martin 2006）＝ F35（Mecella 2013）。従来は『ゲティカ』113 全体と 114 の半ばまで（本訳では，「… 前述のマリシア川沿いで生じた」まで）がデクシッポスに由来すると考えられてきたが，Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 276 n. 436）によれば，ハスディングに関する部分のみデクシッポスに基づく。

274　Marisia：異綴りとして marsida（A）。

275　Miliare：異綴りとして milliaria（L），militare（YZ）。

276　Gilpil：異綴りとして gilfil（OB）。

277　Grisia：異綴りとして grissia（OB）。おそらくムレシュ川（ハンガリー語ではマロシュ川）とドナウ川の三つの支流を指す（Crișul Alb (Fehér–Körös), Crișul Negru (Fekete–Körös), Crișul Repede (Sebes–Körös)）。Devillers（1995: 155 n. 195）参照。

278　Marcomannus：Grillone 版のアパラトゥスでは, クラス I と III, 写本 O がこの綴り（写本 B は複数形の表記）。しかし Mommsen 版のアパラトゥスによれば，クラス I と III でも表記に揺れがあるほか（marcom(m)an(n)us），クラス II の 2 写本は乱れが激しい（maramannos O; maromanni B）。マルコマンニ人については『ゲティカ』89 を参照。

279　Hermundulus：Grillone 版のアパラトゥスでは，クラス I と III，写本 O がこの綴り（写本 B は複数形表記）であるとされる一方，Mommsen 版のアパラトゥスによると，この綴りは写本 X のみである（hermundolus HPVLA; emundulos O; ermunduli B; hermundus Y; hermundurus Z）。単数形であるが，慣例に従って複数形表記とした。ヘルムンドゥリ人は，ストラボン『地理誌』7.1.3 においてはゲルマニアのスエウィ（スエビ）人の一派としてランゴバルド人と併記されている。2 世紀のマルコマンニ戦争でローマに敵対したあとは史料からほぼ姿を消すが，後のテューリンゲン人がその後裔であるとか，アレマン人に吸収されたなどの説がある（*DNP*, s.v. “Hermunduri”; *RGA*, s.v. “Ermunduri”; 佐藤 2021: 122–123, 129–130, 290–291）。

280　Courtois（1955: 32–33）によれば,『ゲティカ』113 ではハスディングの居住地が正確に記されている一方で,『ゲティカ』114 で説明される「ヴァンダル人」の居住地は, むしろヴァンダル人の別の支族であるシリング（シリンギ）人のそれに相応しい。

281　Courtois（1955: 392）はゴート人ゲベリクのウィシマルに対する勝利を 332 年から 337 年 5 月のあいだに置く。先行研究では，ウィシマルはこの戦いで死んだとされている（*RE*, s.v. “Visimar”; *PLRE*, I: 969; *RGA*, s.v. “Visimar”）。確かに，続く『ゲティカ』115 の記述はウィシマルの死を示唆するとはいえ，ここでヨルダネスが用いる動詞 prosterno（降伏させる，破滅させる）からすぐさま彼が死んだと解釈するのは，やや性急であろう。

りを尽くし，出発したところの彼自身の土地へと帰った。それから，逃げたごく少数のヴァンダル人は，彼らのうち戦えない人手を集めて，不幸な祖国をあとにして，元首コンスタンティヌスに彼ら自身のためにパンノニアを要求し，そこに 60 年[282] ほどのあいだ住処をあてがわれて，皇帝たちの命令により居留民として奉仕した[283]。そして長い時が流れてから，軍司令長官であり元コンスル，パトリキウスであったスティリコ[284] からの要請を受け，ガリアを占領した。そこで近隣を略奪しつくし，定まった住処はほぼ持たなかった[285]。

XXIII. 116. さて，ゴート人の王ゲベリクがこの世を去ってからしばらくすると，アマル家のなかで最も高貴なヘルマナリクスがその支配権を受け継いだ[286]。彼は多くの非常に好戦的な北方の諸民族（ゲンテス）[287] を屈服させ，自身の法に従わせた[288]。祖先の少なからぬ人々が，彼を正当にもアレク

282　“LX”: 写本 B, Y は “XL”「40 年」だが，コンスタンティヌス治世（306–337 年）からスティリコの時代（後述）までの時間としては 60 年ほどがふさわしい。

283　「皇帝たちの命令により」（“imperatorum decretis”）定められたとされる事柄が，帝国への奉仕義務と居住地のどちらを指すのかは不明確である（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 277 n. 440）。イタリア語・フランス語・ドイツ語訳は前者の解釈を取り，英語訳は後者の解釈をとる。ヨルダネスがここで語る 4 世紀前半時点でのヴァンダル人のパンノニア居住については，フランス語訳者 Devillers はその史実性を疑う（Devillers 1995: 155 n. 197）一方，Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 277 n. 442）や Burns（1994: 205–206）は肯定的に解釈する。

「居留民」(incolae) の訳語はテオドシウス法典研究会 (1995: 124) による。古典後期のローマ法ではこの用語は，世襲もしくは奴隷解放などによって定められた原籍 origo のある地とは異なる地域（都市）に居住する人物を指した（Jones 1964: 712; テオドシウス法典研究会 1995: 122–124）。ただしヨルダネスがこの法律用語を意識していたかどうかは当然ながら別の問題である。なお，3 世紀以降帝国内に移住した外部集団の法的地位については Mathisen（2006）参照。

284　皇帝ホノリウス（在位 393–423 年）治世前期における西ローマ政府の事実上の最高権力者で，394 年から 408 年まで軍司令長官を務め，400 年と 405 年にはコンスルに就任した。父親がヴァンダル人，母親がローマ人であったと伝えられる。408 年に失脚，処刑された（*OCD*, s.v. “Stilicho”; *DNP*, s.v. “Stilicho”; *ODLA*, s.v. “Stilicho”; *PLRE*, I: 853–858; *RGA*, s.v. “Stilicho”; *CLRE*: 334–335, 344–345）。

285　おそらく 406 年末のヴァンダル人，スエビ人，アラン人らによるガリア侵入のことを指している。経緯については南川（2018: 44–46）および佐藤（2021: 215–223）参照。スティリコとヴァンダル人の協働についてはヨルダネス『ローマーナ』322 でも触れられ，オロシウス『異教徒を論駁する歴史』7.38.3–4 にまで遡るが，その史実性は疑わしい。

286　『ゲティカ』79 に初出の，4 世紀後半のゴート王エルマナリクのこと（ここでは異綴りはなし）。『ゲティカ』116–130 では，エルマナリク治世の出来事が述べられるが，その史実性については多くの議論がある（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 277–278 n. 443 を参照）。

287　クラス III 写本群では，“undecim gentes”（「11 の諸民族」）と，数字が付加されている。ただし以下で述べられている民の数は一見したところ 12 であり，整合しない。この問題については Napol’skich (2016) が詳しい。

288　ここでの記述はアンミアヌス・マルケリヌス『歴史』31.3.1 が情報源とされるが，ヨルダネスはエルマ

サンドロス大王と対比していた[289]。彼が屈服させた人々のなかには，ゴルテスキュタ[290]，アウンクシスのティウドス[291]，ウァシナブロンカス[292]，メレンス，モルデンス，イムニスカリス[293]，ロガンス[294]，タザンス[295]，アタウル[296]，ナウェゴ，ブベゲナス[297]，そしてコルダス[298]がいた[299]。

117．しかし彼はこれほど多くの隷属［民］によって名声を得ていても満足しなかった，ハラリクス[300]が率いていたヘルリ人の民（ゲンス）[301]を，そのうちの多数を虐殺し，その残りを支配下に置くまで

ナリクの偉大さを脚色している。「自身の法に従わせた」（“suisque parere legibus fecit”）はアンミアヌスには見られない記述であるが，イタリア語訳のみ「権力」（potere）とし，他の現代語訳はすべて「法」としている。

289　Devillers（1995: 156 n. 199）によれば，エルマナリクとアレクサンドロスの比較は先行する文献史料には確認できない。

290　Golthescytha：golthescytha/–scitha/–scita（VPL およびクラス III，Mommsen 版），gothescytha/–scitha（HO），gothi scythas（B）。Grillone 版は，Mommsen（1882: 160a）に記された Murllenhoff の意見に拠って Golthescythas と綴るが，写本に例証されず根拠も示していないため，ここでは Mommsen 版の読みを採用する（ただし Napol’skich 2016: 32–33 では，写本 N の綴りが golthescythas であると述べられている。しかし言語学的見地からこの論考でも Mommsen 版の読みに軍配を上げている）。

291　“Thiudos in Aunxis”：Grillone 版のアパラトゥスでは，写本群は皆このようになっているとする（Grillone は Mommsen 1882: 165 の Murllenhoff の意見を参考にしている）。一方 Mommsen 版は “Thiudos Inaunxis” と読みつつ，主としてクラス III の写本群の異読も掲載している。

292　Vasinabroncas：異読として uasinabruncas（YZ），uasinaboroncas（A）。

293　Imniscaris：異読として imnascaris（Z），ymnascaris（Y），ymniscans（A）。

294　Rogans：写本 Z のみの読みだが，Grillone はゴート語の複数対格が –jans になるとしてこの読みを採用する。Mommsen 版では rogas（クラス I および NO），その他は rocas（QTXYB）。*RGA*, s.v. “Rugier” も参照。

295　Tazans：これはクラス III 写本群の読みで，Mommsen 版はその他の写本に現れる tadzans である。

296　Athaul：異読として azaul（L），athual（B），athal（O）。

297　Bubegenas：クラス I 写本群の読み（ただし写本 L は bubeienas）。クラス II は bubegentas，クラス III は bumbegenas と，クラスごとにはっきりと分かれる。

298　Coldas：caldas（O）。英語訳は，最後の二つをまとめて “and the Bubegenas Coldas” と訳している。

299　ここで挙げられる様々な民は，歴史的にヴォルガ川からウラル山地にかけて居住した人々を指すと考えられているが，ここでの表記は崩れているか，あるいは古典期の民族名がゴート語化されたものとされる（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 278 n. 446）。本稿では，写本に例証される限りにおいて Grillone 版の読みに従ったが，歴史言語学の見地からの専論として Korkkanen（1975）および Napol’skich（2016）を参照。

300　他史料からは知られない人物（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 278 n. 447）。Wolfram（1988: 144 = 1990a: 150）は彼がのちの西ゴート人の指導者アラリック（?–410 年）と類縁，あるいはアラリックがこのヘルリ王に因んで命名されたと推測する。

301　ヨルダネスによりゴート人と同様スカンザ島に起源をもつ民とされ（『ゲティカ』23），3 世紀後半にローマ領内を荒らしたとされる。5 世紀にフン人に服属したのち自立，6 世紀までに東帝国の同盟軍となっていた（*OCD,* s.v. “Heruli”; *DNP,* s.v. “Heruli”; *ODLA,* s.v. “Heruli”; *RGA*, s.v. “Heruler”）。

は。すなわち今述べた民(ゲンス)は，歴史家アブラウィウス[302]の言によれば，メオティス湖[303]の近くに住み，ギリシア人が「ヘレ」[304]と呼ぶ湿地に因んでヘルリ人と名付けられた[305]。118. この民(ゲンス)は敏捷であり，それゆえいっそうとても傲慢であった。［M118］すなわち当時，自軍において軽装の兵士を彼らのなかから選ばないような民(ゲンス)はひとつもなかったのである。けれども，その敏捷さが他の戦士たちによって弱められることは滅多になかったとはいえ[306]，彼らはゴート人の安定さと鈍重さ[307]に屈することになった。運命によって，彼らもまた他の民(ゲンテス)たちとともにゲタエ人の王ヘルマナリクス[308]に隷属することになったのである。

119. ヘルリ人の虐殺後，このヘルマナリクス[309]は，ウェネティ人たちに対して軍を動員した。彼らは武器の扱いの面では見下されていたが，人数の多さゆえに強力であり，最初は抵抗しようと試みた。しかし，とりわけ神が許し，武装者の大群がやって来たときには，戦のできない大群は無力である。というのも彼らは，私たちが語りの冒頭で，もしくは諸民族(ゲンテス)の一覧のなかで述べ始めたように[310]，ひとつの祖先に由来し，いまや三つの名前［で呼ばれる集団］，すなわちウェネティ人，アンテス人[311]，スクラヴェニ人[312]を生み出したからである。今日彼らは，私たちの罪の

302　アブラウィウスについては Van Hoof & Van Nuffelen（2020: 137–145）参照。『ゲティカ』28 に初出。*FGrHist*: 708.F3 は『ゲティカ』116–119 をアブラウィウス断片とするが，Van Hoof らは，ゴート王エルマナリクに関するヨルダネスの記述がアンミアヌス・マルケリヌス『歴史』に基づくことから（本稿訳註 288，355 参照），『ゲティカ』117（Mommsen 版）のみをアブラウィウス断片とする。

303　“Meotida palude”：Mommsen 版（HPVLO）の読みをとる。Grillone 版 “Maeotidem paludem” は写本に根拠を持たない。『ゲティカ』翻訳（1）30 節訳註 138 参照。

304　Hele：この読みは写本 Y の hele，X の helae に基づく。Mommsen 版は ele（XY 以外の読み）。

305　同様の語源説明はデクシッポス『スキュティカ』F18（Martin 2006）＝ F24（Mecella 2013）に見られる。別の説明については Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 278 n. 448）に紹介がある。

306　Grillone 版：“Sed quamuis uelocitas eorum ab aliis crebro bellantibus non euacuaretur” を採用するが，“non euacuaretur” は写本 B にのみ見られる読みである。Mommsen 版：evagaret に従う英語訳とドイツ語訳はそれぞれ，「その敏捷さはしばしば他の戦士たちから逃れるのを可能にした」，「しばしば他の戦士たちに対する際の助けとなった」とする。またイタリア語訳は「彼らの敏捷さが他の戦士たちによって混乱に陥れられることは滅多になかったけれども」とするのに対して，フランス語訳は crebro を “aliis…bellantibus” に係るとみて「他の人々が数多くの対戦でその敏捷さを追い詰めることはできなかったけれども」と訳す。

307　tarditas：Grillone（2017: 353 n. 444）によれば，risolutezza（「断固たる態度」）の意味で用いられている。英語訳はこれに従い，determination の訳語を与えるのに対して，フランス語訳とドイツ語訳は，それぞれ pesanteur，Langsamkeit とする。『ゲティカ』95 および本稿訳註 173 も参照。

308　ここでの異綴りは ermanarico（OB），hermanaricho（H）。

309　ここでの異綴りは armanaricus（L），ermanacus（B）。

310　『ゲティカ』34。そこではウェネティ人は gens ではなく，natio と表現されている。

311　Antes：異読として antei（O），hentes（A）。『ゲティカ』34, 35 を参照。

312　Sclaueni：異読として sclaui（OB）。『ゲティカ』34, 35 を参照。

せいで，いたるところで猛威をふるっているが，当時はみなヘルマナリクス[313]の支配に服していた[314]。120. ゲルマニア海[315]の非常に長い沿岸に住んでいるアエスティ[316]の民（ナティオ）もまた同様に，彼〔ヘルマナリクス〕はその思慮深さと勇敢さでもって服属させ，スキュティアとゲルマニアのあらゆる民（ナティオ）に対して，彼自身の労働力に対するがごとく命令を下した[317]。

XXIV．121．オロシウスが述べるところでは[318]，それから長い時をおかずに，あらゆる獰猛さの点でより残虐な[319]フン族（ゲンス）が，ゴート人に対して［敵意を］燃やした。というのも私たちは，古代の人々が述べるように，彼ら〔フン人〕が次のように生じたことを学び知っている。ゴート人の王にしてガダリクス大王の息子であったフィリメルが，スカンザ島[320]を出たのちゲタエ人のすでに五代目の首長の地位にあって，その民（ゲンス）とともにスキュティア人の土地に侵入したことは先に私

313　ここでの異綴りは ermanarici（OB）。

314　Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 278 n. 453）は，ウェネティ人ではなくブルガール人を挙げるヨルダネス『ローマーナ』最後の節である 388 を参照するよう指示する。そこでは 6 世紀半ばの帝国が三つの集団（ブルガール人，アンテス人，スクラヴェニ人）から日々圧迫を受けていることが描かれる。ウェネティ人がタキトゥスに言及されているとはいえ，5 世紀以降に史料に現れ始めることから，『ゲティカ』のこの部分が 6 世紀半ばの観点から執筆され，ヨルダネスは，ユスティニアヌスが統御できなかった集団を支配したエルマナリクを重視しているとするが，より精緻な議論が必要と思われる。

315　バルト海を指す。『ゲティカ』17 も参照。

316　Aestorum : aestrorum（クラス II），aestyorum（A）。アエスティ人については『ゲティカ』36 参照。

317　「彼自身の労働力［ないしは所領か］に対するがごとく命令を下した」（“ac si propriis lavoribus imperavit”）。これはMommsen版と写本群の読みである。一方でMommsen版はアパラトゥスで「おそらく」（fortasse）“labores imperavit”（この場合，「彼自身のものであるかのように労役を命じた」）であろうとし，Grillone 版はこちらを採用している。写本群に根拠を持たないため，ここでは Mommsen 版に従った。

318　オロシウス『異教徒を反駁する歴史』7.33.10。

319　“omni ferocitate atrocior” : 奪格の “omni ferocitate” をめぐって現代語訳の解釈が割れている。訳文では，フン人が全人類のなかで最も残虐な集団と表現されていると解し（Den Boeft et al. 2018: 15），フランス語訳 “plus abominabole que toute autre barbarie” とドイツ語訳 “gewaltiger als jede Wildheit” と同様の解釈で訳した。文法的には “omni ferocitate” を atrocior の比較対象と解している。他方でその語句を性質の奪格と解し，英語訳 “more savage in every kind of ferociousness” とイタリア語訳 “davvero terribile per ogni atrocità” のように，「あらゆる獰猛さにおいてさらに残虐な」とも訳すこともできる。ヨルダネスの文章において奪格を伴う比較級の用例を網羅的に検討したわけではないが，比較対象の奪格と性質の奪格の両方が確認できるため，訳はいずれとも決しがたい。例えば『ゲティカ』23 : “[Suetidi] reliquis corpore eminentiores”「他の人々より大柄な［スエティディ］」（直訳すると「他の人々より身体において際立った」）の corpore は性質を，同 40 : “pene omnibus barbaris Gothi sapientiores”「ほとんど全ての蛮族よりも常に分別のある人々」の omnibus は比較対象を示す。

320　Mommsen 版に従う（『ゲティカ』翻訳（1）9 節訳註 35 参照）。

たちによって述べられたが[321]，彼はその人々（ポプルス）のなかに何人かの女魔術師を見つけた。彼自身が彼女らを祖国の言葉で「ハリウルンナエ」[322]と名付け[323]，彼女らに対して疑いを持ち，彼の［民の］あいだから追放した[324]。彼はその軍団から遠くに追いやられた人々に，荒野でさまようように強いた。122．荒野のなかをさまよう彼女たちを汚れた霊たち[325]が見て，彼女たちを抱きしめてまぐわいに混じりあった[326]とき，それらはこのいとも凶暴な種族（ゲヌス）をもうけた。最初それは沼地のなかにおり，矮躯で醜く弱々しいものであって，人間の種族（ゲヌス）であるとは，人間の言葉に似たような響きを示していたこと以外，その声からはわからなかった。こうしてこのような起源から生み出されたフン人は，ゴート人［と］の境へと到来した[327]。
123．歴史家プリスコスが伝えるように[328]，彼ら野蛮な民（ナティオ）は，メオティス湖[329]の向こう岸に住み着き，他の活動をせずに狩りのみに習熟していたが，人口が増えてからは，近隣の民（ゲンテス）の平穏を詐欺や略奪によってかき乱していた。それゆえ，常にそうであったように，この民（ゲンス）の狩人たちがメオティスの向こう岸で[330]獲物を探そうとしていた[331]とき，雌鹿が突然彼らの方に姿を現したことに気づいた。雌鹿は湖に入って，前に進んだり止まったりして，自ら道案内をしてくれたのであっ

321　『ゲティカ』26 を参照。

322　Haliurunnas：Mommsen 版（HPVLXZ）。Grillone 版 Haliarunnas はゴート語の haljaruna に合わせたものか（Mommsen 1882: 150）。「ハリウルンナエ」はゴート語で “hellish sorceress”「地獄の魔術師」の意とされる（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 280 n. 460; cf.『ゴート語辞典』s.v. “halja”）。

323　cognominauit：写本 X，Z の読み。Mommsen 版は cognominat（SOB）。

324　proturbauit：これは写本 V に見られる写字生による修正に基づくとされ（Giunta & Grillone 1991: XI–XII），また Grillone は時制の統一という観点からこの読みをとるが，Mommsen 版アパラトゥスはこの読みを記載していない（Mommsen 版は proturbat）。また Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 279 n. 458）は，フィリメルによる女たちの追放についてのこの記述が『レビ記』20.6 の暗示である可能性を指摘している（聖書協会共同訳「霊媒や口寄せのもとに赴き，彼らを慕って淫らなことをする者に，私は顔を向け，彼らを民の中から絶つ」）。

325　『ゼカリヤ書』13.2 の暗示かもしれない（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 280 n. 459）。

326　“earum se complexibus in coitu miscuissent”：写本 B の読み。Mommsen 版は写本 A, S, O, B 以外の読み “eorum conplexibus in coitu miscuissent”（「それらの抱擁によって交わりに参加した」）。

327　Maenchen–Helfen（1973: 5）はこのフン人起源譚に堕天使にまつわるキリスト教的伝承の影響を見ている。フン人のイメージについては『ゲティカ』127–128 も参照。

328　プリスコス『歴史』*fr.* 1。

329　『ゲティカ』117 ならびに本稿訳註 303 参照。

330　Grillone 版が採用する “in ulteriore” は，“in ulterioris”（SPXZ），“in ulteris”（Y），“in ulteriori”（B）に基づく修正。Mommsen 版は写本 H，P，V に基づき，“in interioris” とする。写本 L，A は単に interioris。英語訳は，このエピソードがフン人の目線から語られているとして，Mommsen 版を優先し，“The bank of the interior Maeotic swamp” と訳す（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 270 n. 461）。Grillone（2017: 356 n. 460）も参照。

331　Mommsen 版は inquirent（HPV），Grillone 版は inquirerent（LXZ）。

た[332]。124. それ〔雌鹿〕を追って狩人たちは, 海と同じく渡ることができないと考えていた[333] メオティス湖を, 足で越えたのである。それから程なくして, ［その地を］知らなかった彼ら［の前］にスキュティアの地が現れ, 雌鹿は消えた。思うに, この事は［フン人の］誕生をもたらした, かの霊たちが, スキュティア人を妬んで引き起こしたのだった[334]。125. そして, メオティスの奥に別の世界があることをまったく知らなかった彼らは，スキュティアの地への憧憬に導かれ，そして物分かりの良いことに，以前の時代にはまったく知られていなかったその道を，彼らへの啓示であると考え，自分たちのところに戻ると，事の次第を伝え，スキュティアを称えるとともに，自分たちの民（ゲンス）を説得して, 案内役である雌鹿から学んだ道を通ってスキュティアへと急ぎ, 侵入して最初に遭遇したスキュティア人全員を勝利のために捧げ物とし[335]，そして残りの人々を征服して服属させた[336]。
126. すなわち, 彼らはその広大な湖を渡るとすぐ, その地でアルピツリ, アキルツリ[337], イティマリ, トゥンカリ, ボイスキ人ら[338], そのスキュティア［側］の岸辺に住んでいた人々を, いわば諸民族（ゲンテス）の［が巻き込まれた］嵐のようにさらった。同様に，戦闘においては互角だったが，教養と暮らしぶり，姿においては異なっていたアラン人を，度重なる戦闘で疲れさせて屈服させた。127. すなわち彼らは，戦では少しも凌駕できなかったであろう人々を，その表情の恐ろしさによって大いに震えをもたらし，恐怖によって逃亡させたのである。というのも彼らにとって，その見た目は恐るべき黒さであって，こう言うのが許されるのであれば，何らかの歪な塊であって顔ではなく，眼というよ

332　Grillone 版：praebuit，Mommsen 版：tribuit。意味に大差はない。

333　aestimabant：これは主としてクラス II の読み（Mommsen 版のアパラトゥスによれば，ASOB が (a)estimabant とされており，冒頭の綴りに揺れがあるらしい。Grillone 版では A の読みは示されていない）。クラス I の大半（と Mommsen 版）は aestimant，クラス III 写本群は adfirmabant（Mommsen 版アパラトゥスによればクラス III は affirmabant）。

334　Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 281 n. 464）が指摘するように，ここでフン人とスキュティア人が明確に区別されていることは特徴的である。例えば Moravcsik（1958: 279）のリストには，フン人の意味で Σκύθαι の名詞を用いる著作が多数掲載されている（ゾシモス，プリスコス，プロコピオス，アガティアスなど）。

335　この文中の obuios（遭遇した）は写本 V への註記と写本 A にしか現れず，Mommsen 版は採用していない。Grillone 版では，『ゲティカ』65 や 196 での用例との比較からこの語を採用する。

336　『ゲティカ』123–125 は，プロコピオス『戦史』8.5.7–11 と強い対応関係にある。両者の記述はともにプリスコスに遡ると考えるのが自然であるが，『戦史』第 8 巻の完成は 553 年頃と想定されているため（Dewing & Kaldellis 2014: ix–x），プロコピオスが『ゲティカ』から影響を受けた可能性も，アプリオリには排除されない。

337　Acildzuros：写本 P の読み。Mommsen 版は Alcildzuros（HV）。他に acilzuros（L），alchizyros（A^2）（写字生の補記），alcidzuros（SOB），alchidzyros（XY），alchidziros（Z）。

338　Boiscos：クラス I, II の読み。異読として boircos（XYZ）。プリスコス『歴史』*fr.* 2 はフン人に支配されていた人々として「アミルヅロイ，イティマロイ，トゥンスレス，ボイスコイ」（“Ἀμιλζούροις καὶ Ἰτιμάροις καὶ Τούνσουρσι καὶ Βοΐσκοις”）に言及する。これら名称の語源については Maenchen–Helfen（1973: 402, 438–439, 453–454）参照。

りも小さな穴を持っていたのである[339]。野蛮な外見が彼らの心の大胆さを示しているのだが，あまつさえ彼らはその子孫に対して，生まれた初日に怒り狂う。すなわち彼らは男児に対して頬を剣で切るのであって，それは彼ら〔男児〕が乳から栄養を受け取る前に，傷の苦しみを受けるよう強いるためである[340]。128．このため彼らは顎髭のないまま歳を取り，愛くるしさのない青年となる。というのも，剣でしわを刻まれた顔が，傷痕によって年齢に相応しい毛の恵み[341]を拒んでいるからである。体つきは小さいが，巧みな動きを難なくこなし，馬を乗りこなすのにとても敏捷で，肩幅が広く[342]，弓矢を射る準備ができており，首ががっしりとして常に高い自尊心を持ち，かれらは人間の姿のもと，まさに野獣のような獰猛さで暮らしている[343]。
129．ゲタエ人はこのとても放逸な[344]種族（ゲヌス）かつ多くの民（ナティオ）に対する略奪者を見て驚愕し，王とともにどのようにしてこのような敵たちから逃れられるかを検討した[345]。すなわちゴート人の王ヘルマナリクス[346]は，上で述べたように[347]，数多の民（ゲンテス）の征服者として君臨していたとはいえ，しかし彼がフン人の接近について考えるあいだに，当時彼に服従［の意］を示していたうちのひとつである，不誠実なロソモニの民（ゲンス）[348]が，このような機会に彼を陥れることとなった。というのは，今述べた民（ゲンス）の出身であるスニルダ[349]という名のその女性を，［彼女の］夫が不誠実にも［王の元を］

339　フン人のこうした特徴の強調は，ヨルダネスに独自であるらしい（Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 271 n. 468）。

340　Den Boeft et al.（2018: 16–18）によれば，アンミアヌス・マルケリヌス『歴史』31.2.2 からの借用の可能性が高い。

341　“pilorum gratia”：英語訳のように，「顎髭の魅力」をも指しているかもしれない。

342　“scapulis latis”：Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 282 n. 471）は，シドニウス・アポリナリス『詩』2. 259 を参照するよう指示するが，そこでは「素晴らしい肩」（“insignes umeri”）として異なる表現が用いられている。

343　アンミアヌス・マルケリヌス『歴史』31.2.2。なお「野獣のような獰猛さで」（“beluina saeuitia”）という表現はすでに『ゲティカ』24 で用いられており，カッシオドルス『雑纂』9.18 にも同じ表現が見られる。『ゲティカ』翻訳（1）24 節訳註 119 参照。

344　expeditissimus：英語訳とドイツ語訳は「とても好戦的な」（“most warlike; kriegsbegeisterte”）とするのに対して，イタリア語訳は「きわめて動作の速い」（“estremamente rapido negli spostamenti”）。ここではフランス語訳「まったく束縛されない」（“tout à fait dépourvue d’attaches”）に近い解釈をとった。

345　アンミアヌス・マルケリヌス『歴史』31.2.12。

346　ここでの異綴りは ermanaricus（VOB）。

347　『ゲティカ』116 参照。

348　Rosomonorum：クラスを問わず多くの写本がこの綴りであるが（HPAOBXY），写本 V では rosomanorum，写本 L は rosomorum，写本 Z は rosimanorum。この集団名は他の作品では知られておらず，ヘルリ人の一派とするもの，アラン人とするもの，その実在自体を疑うものなど様々な意見がある（*RGA*, s.v. “Rosomonen”; Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 282 n. 475）。

349　Sunilda：これはクラス I の綴り。クラス II では sunielh，クラス III は sunihil。ここでのみ登場し，他の史料には確認されない（*PLRE*, I: 860）。

離れたことによって怒りに駆られた王が，獰猛な馬たちに結びつけ，異なる方向へと走るよう追い立て，引き裂くようにと命じたのだが，彼女の兄弟であるサルスとアンミウス[350]が［その］姉妹の死への報復としてヘルマナリクスの[351]脇腹を剣で貫いたのだった。その傷によって病におかされた彼は，弱々しい身体で病弱な生活に甘んじることとなった[352]。

130．彼〔ヘルマナリクス〕の健康の悪化につけこんで，フン人の王バランベル[353]はオストロゴタエの地域に向けて遠征軍を起こした。ウェセゴタエはすでにこの人々〔オストロゴタエ〕とのつながりから，彼らのあいだでのある対立ゆえに離れてしまっていた[354]。このようななかでヘルマナリクスは，傷の苦痛と同じくらいフン人の侵入にも耐えることができず，老齢となり時が満ちて，110 歳でその生を終えた[355]。彼の死という機会はフン人に，東の地域に留まり，オストロゴタエと呼ばれると私たちが述べたゴート人に対して優位に立つことを許した。

［つづく］

＊付記

本稿は，JSPS 科研費（JP19K01077, JP21K00922, JP19K13389, JP23H00684, JP23K12297）により得られた研究成果の一部である。匿名の査読者から有益なコメントをいただいた。記して感謝申し上げる。

350　Ammius：写本 X，Z では ammus，写本 Y では aminus，写本 A への補記では iammius。なお，この兄弟の名は *PLRE* には立項されていない。

351　Hermanarici：ここでの異綴りは erm.（OB）。

352　スニルダとその兄弟サルスとアンミウスのエピソードは,『ゲティカ』に独特のものである。このエピソードの典拠や着想元については様々な意見がある（Devillers 1995: 158–159 n. 216; Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 283 n. 476）。

353　この箇所からのみ知られる人物（*PLRE*, I: 145）。その実在を疑う説，あるいは 5 世紀半ばの王ウァラミル（『ゲティカ』80 参照）と同一人物であったとみなす説もある（*RGA*, s.v. “Hunnen”; Van Nuffelen & Van Hoof 2020: 371–372）。

354　“quadam inter se contentione, seiuncti habebantur”：Grillone 版によれば写本 A が contentione（「対立ゆえに」）を読むとされるが，Mommsen 版アパラトゥスに記載され，デジタル画像を通じて確認できる写本 A の読みは contencione である。写本 A 以外のクラス I・III に従う Mommsen 版は intentione（「緊張ゆえに」）と読む。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 283 n. 478）も参照。なお写本 B は他写本と大きく異なり, quadam 以下を “discesserant quam dudum inter se sejuncti habebant”（「［ウェセゴタエは彼らとのつながりから］離れており，どれほど長いあいだ彼らのあいだで分かれていたか」）と読む。

355　アンミアヌス・マルケリヌス『歴史』31.3.1–2 はエルマナリクの死を自殺と伝える。Van Nuffelen & Van Hoof（2020: 283 n. 479）はエルマナリクの描写と享年に聖書からの影響を見ている（例えば『創世記』25.8, 50.22）。